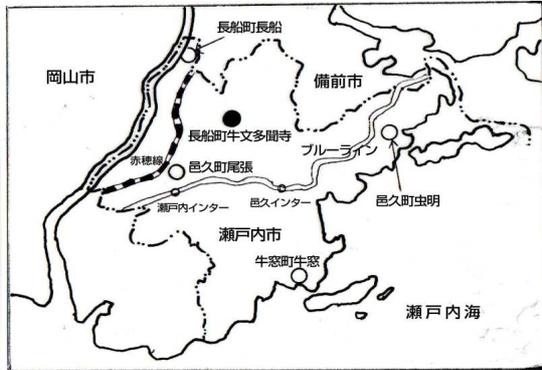


“たたら”と地名

～瀬戸内市長船町牛文多聞寺地区～

特別寄稿 浦上 宏



多聞寺地区の位置

1. 地名について

我々の先祖はどのような営みをしていたのか。それを知る足がかりになるものに地名がある。

地名は営みに必要な事柄が命名される。したがって地名から人々の営みの一端を知ることができる。

紙に書かれたものは時に虚偽や偏見があるが、土に書かれた地名はそのようなものは一切なく正に一級の資料である。

地名は生活共同体である集落の全員の認知により生まれる。共同作業などで場所を指定する場合、その場所の地名を全員が知っていなければ配置できない。

地名には当字（あてじ）が多い。音が合えば漢字は適当に当てられた。本稿に取り上げている「柿段」は「垣段」の宛字である。

地名の欠点は殆どが命名された年代が分からないことである。「須恵」のように須恵器生産に関わる地名はほぼ年代を推測できるが、このような例は稀である。

1) 多聞寺

瀬戸内市長船町牛文に多聞寺という集落がある。建立された多聞寺が集落名になった。

多聞寺地区は丘陵の裾にある集落であるが、集落の最上段に「多聞寺」の地名がある。更に北側の斜面には「多聞寺下」の地名がある(図を参照)。

現状は藪であるが石垣がかなり残っており当時の面影を僅かに留めている。



左上の藪の中に多聞寺跡の石垣と
喜右衛門屋敷跡の石垣がある



多聞寺地区の関係地名

2) 喜右衛門屋敷

喜右衛門屋敷は地図でお分かりのように多聞寺の下にある。現状は藪であるが多聞寺と同様に石垣が残っている。



喜右衛門屋敷跡の石垣

喜右衛門屋敷の下手に「土井下」という地名がある。

土井は土居とも書かれ豪族屋敷の土塁のことである。喜右衛門は集落を支配していた豪族であったと推測できる。

屋敷が多聞寺のすぐ下にあることから考えると、多聞寺は喜右衛門の氏寺として建立されたものであろう。

3) 喜右衛門屋敷火防神社

多聞寺集落の隣に稲荷山という集落がある。ここに祭られている稲荷神社の境外末社に「喜右衛門屋敷火防神社」がある。火防はヒブセと読むのだろうか。祭神は「比左子神」となっている(『邑久郡史』)。

「火防」は「防火」と同じ意であろうから、喜右衛門屋敷に祭られた火の用心の神社と考えられる。

しかし喜右衛門が住んでいた建物の防火の神であれば、建物の消滅とともに役割は終わるから、後々まで火の用心の神のみが祭られることは無いはずである。

この神は喜右衛門の屋敷神ではなく、喜右衛門と共に集落民がある目的で祭った神であるのに相違ない。であるから喜右衛門の家屋が消滅しても集落民が祭り、稲荷神社の境外末社として現在に至っているのだと思う。

祭神の比左子神はどのような神なのかはつきりしない。他の神社で祭られている例も見あたらない。

比左子はヒサゴと読むとすれば同じような言葉に「塞ぐ」があり、フサグ又はヒサグと読む。防ぐという意味がある。

この意を比左子神に当てると「塞神」になり、喜右衛門屋敷火防神社の「火防」に当てはまる。これはあくまで推測であるが、無理なこじつけではないと思う。

以上喜右衛門屋敷火防神社について述べたが、この神社から豪族喜右衛門と配下の一族は火を扱う集団であったと考えられる。このことは多聞寺集落の成り立ちを考える上で重要である。

4) 柿段

地元ではカキノダンと呼称している。地図でお分かりのように多門寺地区で最も広い面積を占めている。「段」は段々の段で、現状も段の状況を保っている。

柿段では果物の柿を栽培していたのだろうか。

冒頭に地名は「営みに必要なもの」に命名されると書いたが、柿は生活の必需品とは言い難く地名になることはまずあり得ない。

県内の小字地名を調べてみると柿地名はたいへん多い。その中から一部を掲載すると、

柿ノ木谷(新見市大佐大井野)

柿木(新見市正田)

柿ノ木(高梁市川上町高山市、笠岡市走出、真庭市草加部)

柿木ノ坪(井原市野上)

柿ノ木田(真庭市西茅部、美作市宮本)

柿ノ木ノダン(岡山市北区建部町角石畝)

柿木峠(真庭市阿口)

柿之町(岡山市北区御津北野)

柿木下(岡山市北区真星)

柿ノ内(鏡野町寺和田)

柿ノ木町(赤磐市仁堀東)

柿ノ木坂(備前市吉永町多麻)。

などがある。

「柿ノ木」など木が付いている地名が多いが接尾語で木の意味はない。

上記をはじめ県内の柿地名の周辺には産鉄関係の地名が密集している地域が多い。このことは柿地名を考える上で重要である。

「垣内」という言葉がある。カキウチまたはカイトと読む。垣内は平安時代に和歌に詠まれているので古い言葉である。

垣内は垣根の内という意で屋敷のことだが、後に小集落の意になった。柿は垣内の垣の当字で、柿段は小集落の跡であると私は考えている。

上記の「柿之町」(岡山市北区御津北野)や「柿ノ内」(鏡野町寺和田)はその適例と言える。

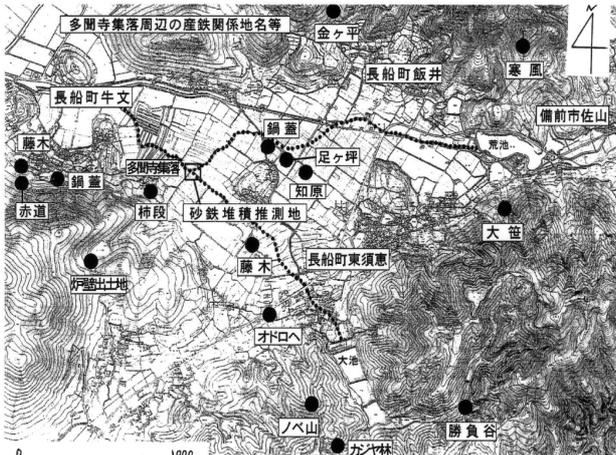
更に柿地名がほとんど産鉄地周辺にあることから、金子、梨子(穴師のアが脱落し梨に当字されたもの)と同義で産鉄従業員住宅地区であったと推測できる。

例えば岡山市北区建部町鶴田にある「カキノコサカ」は漢字に直せば「垣ノ子坂」であろう。

子は人の意で垣ノ子は金子、梨子とほぼ同義であろう。「柿段」は元々「垣ノ子段」の意で子が省略されたものと推測できる。

多聞寺の柿段は産鉄従業員が住んでいた集落跡であると考えてほぼ間違いない。

2. 産鉄関係の地名



この図は多聞寺周辺の産鉄関係の地名地図である。以下各地名の解説をする。

1) 鍋蓋

鍋蓋といえば台所用品の鍋の蓋が連想されることが関係はない。

鍋地名に千種鉄で有名な兵庫県宍粟市千種町の「岩鍋」がある。岩鍋は鉦が盛んに行われていた所である。

古代人は鉄のことを岩のように固いと考えたようで、岩鍋は鉦の意と推測できる。鍋蓋の鍋も鉦の意と思われる。

蓋について参考になるのが美作市川上の「藤蓋」である。

蓋は砂鉄を選別するため藤で編んだ筵を川底に敷いた状態を意味していると思われる。筵は篩の役目で底に砂鉄が溜まる仕組みである。藤筵はカンナ流しに必要な道具である。従って地名の鍋蓋は砂鉄を採取したところの意であろう。藤蓋と鍋蓋は同じ意と考えられる。

鍋蓋の位置は盆地内で最も低い場所、備前市佐山、瀬戸内市飯井・東須恵の山から流れる雨水がすべて集まる場所である。当然風化して流れてきた砂鉄も集まる。

鍋蓋は牛文にもある(図を参照)。

2) 足ヶ坪

足ヶ坪は鍋蓋の上手にある。足は芦の当字で、芦の根には鉄バクテリアの作用で鉄分が付着することから産鉄地名になっている。

足ヶ坪は鍋蓋がかんな流しで砂鉄を採取した場所であることを裏付けている。

芦地名では兵庫県芦屋市、福岡市芦屋などがあり産鉄地名と言われている。

3) 知原

知原は足ヶ坪の上手にある。知は茅(ち)の当字(あてじ)で、チガヤのことで菅(すげ)などの仲間である。知原という地名は県内には外に見あたらないが、菅地名は産鉄地に大変多い。真庭市鍛冶屋の「菅ヶ谷」、総社市延原の「南菅・北菅」など枚挙にいとまがない。

当地の知原は鍋蓋や足ヶ坪の上手にあることから、芦や菅と同じように産鉄に因んだ地名と

考えられる。

4) 勝負谷

鉄の意であるソブがソウブになり、更にショウブに転訛して「勝負」と当字されたものであろう。

県内には「菖蒲」と当字されたものが最も多く、次いで勝負地名が各地にある。勝負谷は産鉄地名である。

5) 寒風

瀬戸内市牛窓町内にある寒風は有名である。

サムカゼと発音している。寒は寒川（サムカワ）などの地名になって全国に点在する産鉄地名である。

寒風のサムは鉄を意味するサナ・サヒ・サビと同類であろう。

6) 金ヶ平

金(かね)は金・銀・鉄・銅などの金属の総称であるが、この地名の金は鉄(砂鉄)のことである。

7) 大笹

笹地名は各地にあるが、植物の笹は人々の営みで地名になるほど必要なものではない。

ササは「笹」・「佐々」・「佐作」・「楽々(ささ)」などと当字されて地名になった。

伯耆地方で祭られている「楽々福(ささふく)神社」は製鉄神として尊崇されていた。楽々(ささ)は砂鉄の意、福は鉦を吹く意であろう。

笹は砂で砂鉄の意と考えられる。

8) カジャ林

「カジャ林」は東斜面に、「ノベ山」は西斜面にある(図を参照)。その頂上に現在は祇園社と龍王宮を祭っている。

カジャ林のハヤシは古い語で『和名抄』には

伊予国越智郡に「拝志(はやし)郷」、讃岐国山田郡に「拝師(はやし)郷などがある。

はやしについて『出雲風土記』秋鹿郡の項で「足高野山」の解説に、

…上頭(みね)に樹林(はやし)あり。此は即ち神の社(もり)なり

とあり、はやしは古代から神が籠もる杜の意とされていた。

カジャ林は鍛冶屋神を祭った杜の意であろう。

9) ノベ山

「ノベ山」のノベはなべ(鍋)が訛ったものと思う。その好例に千種鉄で有名な兵庫県宍粟市千種町に、鉄の大産地である「岩鍋」があることは先に書いた。

現在は「岩野辺(いわのべ)」になっている。なべがのべに訛ったのである。この一例から当地のノベ山は鍋山が訛ったものと推測するのは危険であるが、蓋然性は高いと思う。

なべは前記の鍋蓋の鍋と同じで鉦のことと思われることから、ノベ山は製鉄神を祭った山の意と考えられる。

3. 砂鉄堆積推測地

図のように飯井地区の鍋蓋の上流や東須恵地区には多くの産鉄地名がある。これらの付近は風化した砂鉄が産出した地である。

飯井地区の鍋蓋の付近は旧川筋の合流地で先に書いたように太古から砂鉄が堆積していたと考えられる。

図に旧川筋を点線で表しているが、多聞寺集落の沖で合流している。

この合流地は先に書いた鍋蓋と同様砂鉄の堆積地であったと推測できる。

長船町長船地区に「サナ」という地名がある。長船地区で最も低い所がかつて旧吉井川の分流

と旧香登川が合流した箇所である。サナは砂鉄の意で合流地は砂鉄が溜まる格好の例である。

1) 藤地名

産鉄地の周辺には必ずと言っていいほど「藤」地名がある。藤の蔓で編んだ筵はかんな流しの必需品であることは先に書いた。

図のように長船町牛文と長船町東須恵に「藤木」と「オドロヘ」がある。オドロは県北の方言で藤などの群生地を意味する地名である。オドロへのへは場所の意である。

これらの場所に生えている藤で「鍋蓋」で使った筵を編んだものと思われる。

新見市赤馬の「金藤」（金は砂鉄の意）

総社市山田の「藤砂」（砂は砂鉄の意）

などは、砂鉄採取の藤筵の意をよく表している。

因みに県北の地名であるオドロがなぜ県南の当地にあるのか考えてみたい。

冒頭に地名は生活共同体の全員が認知して地名になると書いた。県南の人が県北に出かけてオドロを見聞した位で県南の藤地名がオドロ地名に変更することはあり得ない。

オドロと命名した県北人が集団で当地へ移住したと考えるのが順当ではないだろうか。

しかもその集団はオドロを必要とする集団であるから、たたらに従事する集団であろう。

2) 鉾滓



土した鉾滓

多聞寺地区で出

多聞寺集落の南西の方向に十二ヶ谷池という

池がある。その上手で鉾滓が発見された(図に炉壁出土地となっている箇所である)。鉾滓は金属を精錬する際にできるいわゆる金屎(かなくそ)である。

この付近に鉾があつたと考えてほぼ間違いなからう。

先に喜右衛門屋敷に祭られていたのは防火の神と推測したが、タタラの守護神として祭ったのであろう。

4. まとめ

喜右衛門はたたら集団を配下にした豪族であった。その集団は柿段を住居にした。オドロへの地名から集団は製鉄の先進地である県北から移住してきた可能性もあるだろう。

原料の砂鉄が確保出来たことは周辺の産鉄地名から伺える。鉄滓が出土したことでたたら操業がほぼ確定した。製鉄で富を蓄えた喜右衛門は屋敷の上手に多聞寺を建立し氏寺とした。

多聞寺周辺を振り返って見ると牛文地区には牛文茶臼山古墳があり、多聞寺のすぐ南の東須恵地区には山崎古墳群がある。更に東隣の飯井地区には南浦・向山古墳群がある。

また飯井地区には荒池を造り条里制の水田を造成している。後の時代に畑山大聖寺が建立された。

このような大きな営みが古代から続き、人口も増え豊かな暮らしであったと推測出来る。従って鉄の需要は大きく、喜右衛門はある時代にその鉄を供給したのであろう。

これを立証するものは地名と遺物・遺構である。冒頭に書いたがその地名が必要であった理由を理解すれば、地域の営みを垣間見ることが出来る。

「中国と漢字伝来の時代」(1)

呉音と漢音の諸問題

先史古代研究会会員 矢吹壽年

1. 漢字の歴史的背景の概説

中国文明は、黄河文明として説明されてきた。だがしかし、最近の発掘による出土品からの考証で長江文明の方が約千年これに先行することが判明している。

小麦や粟・稗を食べ、羊の肉を食らう北部の支那人よりもコメを食う南中国の方が、より早く進んだ文化を保持していたということだ。亡くなられた一宮の黒住秀雄さんがよく言っていたことを思い出すが、一般的に「コメを食う人間は円満で、肉を食う人間は得てして力で辺りを征服しようとする。比べてコメを食う人間は暖かくて柔らかい。人とも仲良くしていける」中国語の文化が、コメの栽培を覚えた長江周辺で発生し、長江の上流、また下流へ伝わり、海岸沿いに北上して黄河に至り、黄河を遡って長安の辺りに興る黄河文明へと発展する。

ここに騎馬民族系の遊牧民族が平原の肥沃な高原を占拠し、狄（えびす）と呼ばれながら建てた小さな国家体制が、やがて青銅製の武器を用いて中国を征服する。

それ以前、夏・殷・周・漢と建国が続いた中国は、王朝が変われば哲学も文化も言葉も変わったことが明らかにされている。漢の鉄は青銅文化を駆逐する。こうして鉄は金の王座を獲る。それまで真金（金の王座）とは黄金であった。

青春・朱夏・白秋・玄冬・中央は黄中と云う。皇帝の宮廷を黄色で暮く理由である。これに金属を当てる。青金・朱金・白金・黒金である。青金は錫・赤金は銅・白金は銀・黒金は鉄

であって、中央の真金は黄金であった。しかし、鉄を武器として中国を統一した時代、金の中の王はてつとなった。つまり吉備の枕言葉「真金吹く」は黄金であった。

論語の「述而」に孔子が周の標準語で読誦したのは詩経と書経であった。また、礼を執り行う際の礼文も標準語で読んだと出ている。中国南部に呉音が残り、日本へも伝わっているのであれば、殷・周王朝では呉音が標準語であったと云う事が出来るのではないかと思っている。

前1050年頃（現在から約3000年以前）、中国、殷において神権政治を行い、政治的・宗教的に天意を伺う方法として、晴雨の予報まで甲骨に質問事項を記入しこれを焼いて占い、結果を漢字として残した。神意を窺うのに巫女を用いた。巫女はまた、大臣の位に登った。（中国人が卑弥呼を同様に理解したであろう）殷は前約1700～前約1100年の600年続いていたが、その間、祭・政を神と共に施した。

こうして中国では文字を使うようになる。用いていた言葉に字を当てていただろうから、漢字成立と音読みは当時、一緒であった筈だ。それは、後に呉音と呼ばれる。全て神を信仰し、神を恐れ、神と共に遊び、神に問う。社会主義の現在の支那では理解できないので否定してしまう。（現在では中国古代神話の意味を解明出来ないのだ）白川静博士の漢字研究は殷の時代の民俗・習俗を示唆してくれている。

銅鐸の不思議も、銅鐸は神と共に稲作を行っていた民衆が、銅鐸を鳴らして神を呼び喜ばせ、豊作を祈ったのだ。島根県の荒神谷で考えた。大きな銅鐸は遅れるが大きな村の祭りで鳴らし、小さな銅鐸は少人数での祭祀を思わせる。神事として使用していた銅鐸を同時にもたらし、耕作を始めたと考えられ、この民衆が海を渡ってきて日本で稲を栽培したのだ。別々に導入した

とすると銅鐸の存在と数は説明できない。流水紋と呼ばれた銅鐸のデザインは神と一緒にあって、水稻を栽培した民衆が祀る神事の主役であり、神聖な祭場を表す霊雲紋と呼ぶべきであった。打ち鳴らす小さな音に民衆は神の喜びを感じ、豊作を神が宣言するのを感じたのであろう。収穫の感謝にも鳴らしたのであろう。銅鐸の出土地が北九州に少なく関東以北は少ない。少しは訂正しなければならないだろうが起源はこれで良い。

日本では縄文時代に稲作が始まる。岡山理科大学の侵入路入り口に残る朝寝鼻遺跡で、発見されたプラントオパールが出土した約 6500 年以前となる。耕作畑は岡山市鹿田の微高地と推測する。陸稲（おかぼ）の栽培を知ったわが国では、コメの美味なこととある程度の量を得られたこと。環境にあった容易な栽培法に、雑穀と同じように考えていたのであろう。陸稲は彼らを包んでいた気象環境が全幅の信頼をおけるだけの対象ではありえなかった。

それだけ厳しい環境に生きていた彼らに次にもたらされた文化は、水稻栽培であった。紀元前 2～3 世紀頃と推測される。銅鐸の伝来とほぼ同時代である。

近畿以西に於いて、河川や池沼の水を用水として家族を一年間養うだけの量が得られ、糯（もち）と粳（うるち）の差があり、早稲（わせ）中稲（なかくて）晩稲（おくて）の差もやがて分かれて来る。陸稲にも比べて水耕の収穫は彼等の希望通りの収穫が得られるものであった。

そこで沸騰炊飯用の土器が流行する。（これが弥生式土器と呼ばれる。）食の変革と安定した環境が弥生時代をもたらす。一族は総員が健康で以前よりやや長寿となり、幼児の死亡率も減少したのであろう。しかし動物性蛋白質を取得するために、猪や鹿を追い海洋の大型漁業の為に壮年の男子を中心に短期間の旅行が青少年を率いて行われたのであろう。縄文時代からあった狩猟

旅行であったが、やはり自然の神達に祈りを捧げて行われた。豊猟（漁）と無事帰還祈り、を浮気封じは男女お互いであつたろう。若い青少年達には他部族の美少女達を見初める絶好の機会であった。これを祈る場所がそのうち定まり、神社の基となる。

新石器・旧石器の時代区分では弥生時代に青銅器も伝わって使用を始めるが、容易に手に入る材料で便利であった石器は弥生時代を通じて使用されていたから弥生時代は新石器時代の中にはいる。

中国の長江付近の青銅器に見えるデザインにも水耕稲作の環境に見える蛇やアメンボウに銅鐸のデザインとの共通性を感じる。前 2 世紀ごろには新しい文化の到来が見える。陝西省辺りに侵入していた後進部族で殷に供貢していた周辺部族が近隣の部族を従えて、国力を貯え、殷を滅ぼして周を建国し長安付近に都を置く。殷の遺民の抵抗、反乱の伝承が残されている所を見ると、殷の習俗とは異なった政策であつたろう。伯夷・叔齊の餓死はその一例である。

文字を知らなかったとされていた日本によく伝来のきっかけが訪れる。彼ら殷の遺民も朝鮮・日本へ渡来の可能性はある。少人数が幾つにも分かれて渡来したから、げんごに影響を及ぼすことは無かった。

前 221～207 年戦国七雄の中で最後の勝利を得て陝西省の僻地にあった後進の秦が中国大陸を統一、秦の強法圧制を嫌った呉楚の民の一部は、新天地を求めて海流に乗り脱出する。彼らが伝えた稲作は水稻栽培であろう。

支那と呼ばれた中国はこの秦の発音に拠るとも云われる CHINA への当て字である。支は普通に読まれるが、那は呉音である。

2. 日本列島には呉音が前 2～3 世紀に

伝来

前 219 年秦始皇帝が、泰山で封禪の祀りをし、方士徐福は不老不死の仙薬を求めて、未婚の男女三千人、穀種、教授、技巧士等を舶載して東海に出航、不帰（かえらず）と云う。

秦以前に書かれた、道教の教科書的な書物は、呉音で読むように表記してあった。焚書坑儒は漢音読みで統一する目的もあったらうか。方士の必読書、淮南子（えなんじ）も呉音表記であった。一方、漢音は、途中から中国の地域へ外域から武力的優因で侵入してきて中国人には「えびす」と見下された人たちが建国した野蛮人の国であり、方言丸出しの田舎言葉が標準語となったようなものであった。（これが漢音）三皇・五帝はいざ知らず「夏王朝」・「殷王朝」は共に黄河流域を根拠地とする黄河文明は長江の先進文化を習得して成立した。漢字の成立時の音読みは呉音と云われた長江周辺の先進文化の言葉であった。

これを受けて封建制で統治されたのが「周王朝」（前約 1100～前約 700）王の親族や縁族を各地に封じ、礼秩序による政治体制を確立する。封建制度で国内を統治しようとした。当然呉音を使っていたと推測する。

周は紀元前 771 年に西北から侵入した、犬戎（けんじゅう）に追われ現在の洛陽に遷都（前約～前 256）する。これ以降を東周と呼ぶ。政治的弱体の時代で以後、春秋戦国時代と呼ぶ乱世を経てこれ以後、紀元前 221 年統一、始皇帝号を用いた「秦」である。

秦の富国の要因は、仟陌（せんぱく）の法＝**条里制と同じく、耕地整理と戸籍、徴税、徴兵を同時に担う**。を公布して国民に生産を負担させ、兵役を課した。貴重な塩や鉄は専売品とし、利益は戦費として蓄積され、有利な商品としての流通を制御し反乱の源を絶った。秦王は皇帝着座に際し、道教の説を用い、皇帝位の正当性を宣言する。儒家からすると脅威であった。焚書坑儒の一因

である。

銅鏡の銘文に道教の方士になれば国政に参画して大臣にもなる事ができると記す。それまでは、国政に関与できるのは儒家の学問の修学者のみであった。孔子もこれを目差していたのだ。

3. 仏教経典が文字普及の大役を果たす

仏教公伝に見えない仏教伝来の事実が、今まで中国の記録のみに期待し、また、北伝のみに固定されていた。北伝仏教は大乗仏教が唱えられ、整えられてから、ガンダーラ地方を経て、敦煌を通して道教の一派の体裁をとりながら、インド医学や薬学、算術等の文化を伴って伝えられた。儒教を学習する学生も新来の学問として修学したから、中国全般に広まり、インド数学、特に九九は仏教と離れて広まった。南伝の小乗仏教は北伝仏教より早く伝えられている可能性を指摘したい。

中国ではもっぱら陸上の道を使用しての通商であったが、インド・ローマ・ペルシャでは隣文明との大型の帆船による航海が行われ、東南アジアのタイ・カンボジア・ミャンマーを中継基地として、中国まで交易していて、1・2 世紀頃まで各地に商社を持ち、一部富豪の者は国政にも関与した。朝鮮の伽耶初代国王の王妃はインドの出生と伝えるのも、このあたりに根拠があったかもしれない。

後世、西遊記の記載に見える道教と仏教の物語は、唐僧玄奘三蔵の求経旅行の話であるが、仏教流布は翻訳僧の鳩摩羅汁の功績も大いに讃えられる。ここでお伝えしたいのは今まで紹介されなかった、南伝に関わる。西暦紀元前 380 年頃、インドに於いて仏教が大衆部と上座部に分裂し、部派仏教が始まる。大乗仏教と小乗仏教と呼ぶ。小乗仏教は自利の成仏を考え教理が狭く消極的な派で、ビルマ・タイ・インドネシア・ベトナム・マレーシアに伝わり、観音信

仰などは中国南部に及んでいる。

インドのマウルヤ王朝の皇帝として全インドを統治した、アショーカ王の残した事業で、アショーカ王の宗教運動は、インド仏教史、インド思想史、インドの歴史上特筆すべき、画期的な出来事であった。(木村日記著「アショーカ王とインド思想」以文選書 26、教育出版センター、(宗教書以外の仏教歴史で南伝仏教の伝播を紹介されたのは聞かない)これによると、やがて王位についたアショーカ王は仏教を信奉し帰依した。これを灌頂と表現しているが、この仏教的善事を磨崖(巖面)法勅刻文に残し、アショーカ王の同時代の諸王国として、エジプト王、セイロン王、南方インド諸国、及びアレキサンダー領土の外国王を挙げている。中国の周末～春秋時代の乱世は認識していない。秦が六国を滅ぼして中国を統一したのは前 221 年である。

1. Anitiyoka (Anitiochus Theos of Syria Of Western aAsia B.C. 261-246)
2. Turamoya (Pyolemiy Philadelphua of Egypt B.C. 285-247)
3. Maka (Magas of Cyrene in NorthAfrica about B.C. 285-258)
4. Anitikini (Anyigonos Gonatas of Macedonia B.C. 277-239)
5. Alikasudara (Alexandar of Corinth B.C. 252-244)

これらの年代はインドの資料から計算したのではなく、全く独立の根拠によっている。これら、諸王の中で最も確実なのが第 5 の王、アレキサンダーで、西暦紀元前 252 年である。そして、磨崖法勅第 13 章に記名してある諸王は、アショーカ王と同時代であり、磨崖法勅第 3、第 4、並びに石柱法勅、題章によれば、アショーカ王灌頂第 12 年(仏教入信の式)を過ぎた時、磨崖法勅(小磨崖を除く)全部を刻した旨が記載されているから、アショーカ王が熱心な仏教となって、法大官を国の内外に派遣した(仏教

の広宣流布は、仏教を信仰する信徒としての義務であり、これを行うことは、最大、無限の功德になると説かれている。王はこのように素晴らしい教えが自分の国に在り、その教えに基づいて自分の国を統治していることを諸外国に派遣して宣伝している。当然海軍を同乗させた船団によって派遣し、仏教布教の僧団、経や論文、法会の儀器や楽器等をもたらしたのであろう。)のは灌頂第 13 年となる訳である。そうするとアショーカ王の灌頂 13 年が前期の五王と同時代になる。

五王の中で即位年代の最も新しいのが第 5 のアレキサンダーで、この彼王を基準に考えると、西暦紀元前 265 年がアショーカ王の即位灌頂の年となる。しかし、前見論毘婆娑という本や南伝によると、即位灌頂の式を行う前にすでに 4 ヶ年王位にあったと云うのである。摂政に付いたのは西暦前 261 年となる。

とにかく、アショーカ王の船団による広宣流布が南伝仏教としてタイ・カンボジア・ビルマ地方へ伝わったことを示唆している。当時の文明地、エジプト・ローマ・マケドニア・ペルシャが他の文明圏と、交易することで利益を得、経済的な収益と国民の前進的発展力を増しつつ自国の国益を確保していった。他地域の先進的医療や、薬剤の調達、便利な器具や美術品、貴重な鉄や宝石加工品、科学技術の交換や珍しい布帛、染色及び原材料、音楽や劇の紹介がこの時代の実際に行われていたと認識しなければならない。日本では縄文土器から弥生土器の時代である。南伝仏教は小乗仏教であった。

大乘は小乗の上級に位置する教えであると、仏教哲学では捉えられている。南伝の小乗仏教は確かに日本に及んでおり、民間信仰と一緒にあって、北伝仏教が伝来して以降、修験道として、仏教・神道と習合して日本的独自の東洋神仙宗教として発展する。南伝仏教が日本にもたらしたものは、龍信仰、観音信仰、地藏信仰、

阿弥陀信仰、弥勒信仰などである。小乗はいつでも大乘に入信しても良く勿論小乗に固執してもかまは無い。台状への入り口と理解して良い。

4. 漢字伝来前後の年譜（1）

西暦 57 年とされる弥生時代の倭奴国（わのなこく）から、漢の光武帝に貢ぎするときに提出されたと推定される国書がある。中国の王に対する表敬文である。（我が国が漢字を使用した記録の最初である。中国や朝鮮からの帰来人の筆記であったかもしれない）

西暦 107 年、倭の国王帥升（すいしょう）等が後漢に生口 160 人を贈り謁見を求める。日本では弥生時代末のことである。



188 年頃後漢の桓帝（かんてい）・霊帝の間（47～188）光和年中（178～183）倭国が乱れて攻伐が続き、ついに卑弥呼（呉音読み＝ひみこ・漢音読み＝ひびこ）を共立して女王とする。

238 年この年（南朝呉の朱鳥元年）の銘のある鏡が、甲斐国西八代郡の古墳から出土する。中国に記録されたかどうかは別としても、これらと同様の交際の存在を思わせる。呉の周辺が水耕稲作文化の古郷とするのは偶然ではないと納得する。

238 年帯方郡主、公孫淵、魏に誅されて中国に朝貢の道が開く。以前から倭は中国に朝貢も帯方郡で搾取されていたようだ。

239 年卑弥呼、使人難升米（なんしょうまい・漢読み＝だんしょうべい、またはだんしょうめ）らを魏に派遣、男生口四人女生口六人そ

の他を献上、12 月魏王、卑弥呼を親魏倭王となし、金印・紫綬をあたえ銅鏡百枚などの好物を下賜される。

240 年この年、帯方太守弓遵（きゅうじゅん）、魏の詔書、印綬、賜物、を倭国へ送付する。卑弥呼の家来に魏王の詔書・印綬を下賜、これは属国と看做されている。

243 年卑弥呼、魏王に使者を派遣し、生口その他を贈り使者掖耶狗（えきじゃく・漢読みえきやこう）は率善中郎将（中国の官職名）の印綬をもらう。陪臣として魏王の家臣扱いであるが、考えを変えてみると、下記の理由もあると指摘できる。

245 年この年、魏の齊王、邪馬台国の使者難升米に黄幢（こうどう・指揮者が揮（ふる）う旗、他国の使人に与えるものでない物、或は朝鮮派兵許可か、魏の軍事指揮権を担う）を与える。これは、中国の法に準えて、死後葬祭は中国の法の通りの造墓規模を承認している事になると思われる。（前方後円墳を含めて大規模古墳建造の根拠ではないか）

この続きは 4. 漢字伝来の前後の年譜（2）として掲載します。

“きび考” 12 号の掲載内容

4. 漢字伝来の前後の年譜（2）
5. 呉音から漢音へ
6. 漢字発音の歴史の概説
7. 考古学者の苦悩 漢音読み

益々佳境入ります。お楽しみに

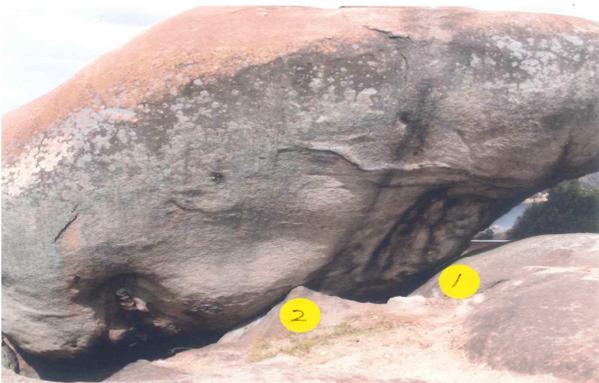
笠岡の高島から 「子妊石」の現状

藪田徳蔵先輩からのお手紙から

会員 山崎泰二

平成 25 年の秋に、「神武東征児島高島巡りシリーズ第 1 弾」として笠岡諸島の高島を訪問した。あれから 4 年も過ぎた。お手紙では 85 歳になり加齢と戦いながら、裏山の「子妊石」は主にご夫妻で守って来られた。当時は島中をご夫妻でご案内を戴いた。健筆なお手紙を紹介したかったが、ご本人が遠慮がちに強く辞退なされたので、私信でもありここではお手紙から私なりに付度（そんたく）して、「子妊石」の現状を報告させて頂きます。

戴いた写真には下記の解説も添付されています。



① の箇所は 23 年皆さんが来訪された折には土砂やグリ石で埋没していた箇所です。昔大地震の跡で土砂を取り除くのが、どうも据付けた人の意に沿うように思えます。1m の斜面に平行に隙間を造っています。下の自然石は其の儘に上の巨石の方を焼いて抉（えぐ）ってあります。1cm の箇所が 2 箇所ほどあり。

- ② の東南部に異常に張り出した偏重荷重を 40° で受け止めています。微妙な②の仕口で 1cm の隙間が保たれ、万一の大地震には左下部の孫姫石（命名が絶妙？）と①の部分で受け止める事になっていると思います。
- ③ の 1cm 間隔技術の誇示、それは製作集団の軍事力の誇示にも見えます。



重量も計算して一回で大体を収めて、少しづつ削って据えたと思います。



能力と技術、当時の繁栄それにしては重機のない時代の仕事、凄いと思います。

以上 藪田徳蔵氏の解説です。

笠岡の高島には高島神社や真名井の井戸など、神武東征伝説の有力地として他に遜色ない史跡が保存されています。詳しくは“きび考” 5 号と 6 号に掲載していますが、過疎地ながら皆さん頑張って守っておいでです。ご夫妻とも、お体を大切に次のお便りをお待

ちしています。

大廻り小廻り山 古代山城 名「菊山城」説の考察

会員 丸谷憲二

1 はじめに

江戸時代の古絵図がある。城内中央に「小廻りノ内」、両端に「築地山小廻り堀筋」と墨書されている。これが初見であろう。古代山城名の推定として「菊山城」説がある。中西厚（当会会員）説である。



大廻り小廻り山の山裾にある瀬戸町菊山(きくやま)に注目された。「菊山は山裾にある地名である。山ではないのに、何故、山がつくのか。」である。

古代山城には、「キ」の字の付く山城が多い。「播磨 城山(きの)・讃岐 城山城(き)跡・備中 鬼ノ城山城(き)・肥前 基肆城(きい)・肥後 鞠智城(きくち)と、「キ」の付く山城が5城ある。「キ」は「城・鬼・基・鞠」と表記されている。「キ」は何を意味しているのかに2説ある。1説は「キを城とする古代朝鮮語説」である。しかし、古代朝鮮語と称されるのは、10～15世紀に使用されていた中世の高麗語である。古代朝鮮語の音は不明である。最初に「キ」の付く山

城に注目されたのは葛原克人氏(岡山県古代吉備文化財センター)である。「キとは百済の古語で城そのものを指す表音といわれる」としている。

2 肥後 鞠智城(きくち)からの推定

鞠智城は、7世紀後半に大和朝廷が築いた山城である。『続日本紀』記載されている。663年の「白村江の戦い」で大敗した大和朝廷が、日本



列島への侵攻に」に備え西日本各地に築いた城の一つである。九州を統治していた大宰府やそれを守る大野城・基肆(きい)城に武器・食糧を補給する支援基地とされている。周囲長3.5kmは大廻り小廻り山城の周囲長3.2kmに近似している。面積55ha。八角形建物跡や72棟の建物跡、貯水池跡、土塁跡などが発見されている。

3 『紀氏は周王朝の子孫説』日根輝己説

日根輝己氏(和歌山県地方新聞協会会長)は、「紀氏は何処からやってきたのか」の調査結果として、「紀氏は周王朝の子孫説」を主張している。要点は、「紀氏は中国の古代国家・周(BC1100～BC256)と、周の滅亡後分裂した国の多くを建てた姫氏の血をひく一族だろう。朝鮮南部の伽耶を経由して日本に渡来、九州中央部の佐賀県基山町附近や、熊本の菊池川流域を拠点に根を張り、西日本全域に勢力を広げた。南河内に進出したあと、紀州に居を移した。そして、紀の

王国を作った。」である。

「日根輝己氏の主張は、東アジア全体を巻き込んだ人間の移動を推測した壮大な仮説で、いまだかつて誰も唱えたことがない新説だ。この部分はまだ考古学的な裏付けや文献上での直接的な証拠はないようだが、状況証拠としてはありえぬことではない。」と内倉武久氏(元朝日新聞)は説明している。日根輝己氏は証拠として4説を上げている。

① 8世紀の好字令で地名が2字に改められたが、紀氏は頑として変えなかった。「キ」という氏族名に大変なプライドを持っていた。

② 『魏志倭人伝』に、「倭人は自ら大夫(たいふ)と名乗っていた。」とある。大夫とは周王朝の官位の一つである。

③ 『魏志倭人伝』に、「呉の太伯の子孫と名乗った」とある。

太伯は周の大王の長男であり、呉の王家も姫姓を名乗っていた。

④ 紀と姫は字は違うが、音は両方とも「キ」である。

日根輝己氏は「古代の謎に挑戦すると、必ず紀氏と伽耶に突き当たり」と報告している。

日根輝己説に追記すれば、③の太伯地名があるのは吉備国のみであり、朝鮮南部の伽耶を經由して吉備国に渡来である。

4 『日本書紀私記零本』「姫氏国名者。倭国之名也」

『日本書紀』は平安時代に、721年～965年の7回の講書が行われた。

『日本書紀私記零本』は、『日本書紀』を講じた博士の私記である。

『日本書紀私記零本』に、「姫氏国名者。倭国之名也」とあり、倭国が姫氏国と呼ばれていたとの記録である。『中国姓氏辞典』に、「姫キ：周朝の宗室がこの姓を用い」とあり、周(BC1046頃 - BC256年)は殷を倒して王朝を開いた。国

姓は姫(キ)とある。「キ」とは呉国からの渡来人「姫(キ)」氏のことである。姫(キ)氏は、「紀・木・鬼・基・城等」と表記されている。

4.1 『野馬台詩』「東海姫氏国」

「東海姫氏国」の初見は『野馬台詩』である。著者は5～6世紀の中国梁の武帝時代の僧・宝誌和尚(418～514年)とされる。伝説化された僧である。小峰和明氏(立教大学教授)は「不思議なテキストがある。五言二十四句の短い詩であるが、もともとばらばらに並べかえられ、そのままでは読めないようになっている。しかもその内容は、日本の終末を予言する物で、未来記と呼ばれるテキストの一種であるとされ」と序に書いている。中世では「やまとし」と呼ばれ日本の古称「やまと」の語源に深くかかわるテキストである。

『野馬台詩』に「東海姫氏国」と記述されている。小峰和明氏は「姫氏は『史記』周紀「別姓姫氏」などを見るが、これも日本の女帝のイメージがかぶせられるようになる」と説明している。『野馬台詩』を引用するのは『日本書紀私記零本』である。天照大神や神功皇后が女であることから「姫氏国」の名が出たかとされる。

問。此國稱・姫氏國。若有其說乎。
師說。梁時寶誌和尚識云。東海姫氏國。又本朝僧善禱推紀云。東海
姫氏國者。倭國之名也。今案。天照大神者。始祖・陰神也。神功皇后者

4.2 吉備真備と「東海姫氏国」

神野志隆光氏(東京大学教授)は、「東海姫氏国考」の冒頭に「東海姫氏国あるいは姫氏国が、この国の呼び名(国号)の一としてあったことは、『日本書紀私記』『日本書紀纂疏』等に見るところである。現在、それについて正面から取り上

げられることは無い。取り上げるほどのこともないという扱いである。」と説明している。

室町時代の日本書紀神代巻注釈を代表する二巻をおさめる天理図書館善本叢書『日本書紀纂疏 日本書紀抄』の、一條兼良の『日本書紀纂疏』に「日本の別号を十三項にわたって取り上げた。その第五である。まず『晋書』に「呉の太伯」の子孫とあるから、宝誌は、周と同じ姫氏だということで「姫氏国」と呼んだものだとしつつ、これを「付会」の言にすぎないと切り捨てている」。比較的近年に包括的に国号を論じた岩橋小弥太『日本の国号』にも「姫氏国」は取り上げられていない。

「野馬台之起」は、遣唐使吉備真備の話として「野馬台詩」伝来の事情を語る。唐において真備に与えられた試練の一つに、宝誌が作った「乱行不同の文」、すなわち「野馬台詩」の解説があった。真備が東の方に向かって仏天の加護を願ったところ、長谷寺観音が蜘蛛となって現じ、その引いた糸にしたがって読むことができたというのである。

5 『姓氏家系大辞典』の「キ」

「紀氏は太古以来の大姓にして」とし、紀キは「木・イ+己・記・城に通じ用ひられ、中世以来、其の韻を添へて紀伊につくる。よりにて、城井・基肆・紀井等にも通ず。」「肥前国に杵肆城(きい)、筑前に記夷城あり、皆古くはきなり。魏志東夷傳に鬼国見ゆ」とある。

「播磨備前の紀氏」の説明もされている。

6 まとめ

『晋書』に呉の太伯の子孫とあるから、宝誌は周と同じ姫氏だということで姫氏国と呼んだものだとしつつ、これを付会の言にすぎないと切り捨てている」。ここに、日本の古代史研究の問題点が凝縮されている。結論ありきである。内倉武久氏は「学会の学問以前のきわめて日本

的な人間関係ではないでしょうか。・・・違う意見は徹底して無視する。」と纏められている。

大廻り小廻り山の古代山城名説は中西厚氏の菊山城説のみである。菊山城説に注目したい。

7 参考文献

- ① 国史大系第八巻 『日本書紀私記』昭和 44 年 吉川弘文館
- ② 『中国姓氏事典』日中民族科学研究所編 昭和 58 年 国書刊行会
- ③ 『謎の巨大氏族 紀氏』内倉武久 1994 三一書房
- ④ 『謎の画像鏡と紀氏』日根輝己 平成 4 年 燃焼社
- ⑤ 『倭国 闇からの光』日根輝己 1990 年 アイペック
- ⑥ 『野馬台詩の謎 歴史叙述としての未来記』小峰和明 2003 年 岩波書店
- ⑦ 『東海姫氏国 考 承平の日本紀講書をめぐって』神野志隆光 『論集神代文学 第二十六冊』万葉七曜会 2004 年 笠間書店
- ⑧ 『日本の古代国家と城』佐藤宗諱 1994 年 新人物往來社
- ⑨ 『東洋文庫 457 続日本紀 1』直木孝次郎他訳注 1986 年 平凡社
- ⑩ 『続日本紀上』全現代語訳 宇治谷孟 1992 年 講談社
- ⑪ 『新訂 続日本紀牽引上 地名部人名部』熊谷幸次郎編 昭和 54 年 文献出版
- ⑫ 『姓氏家系大辞典 第二巻』太田亮 平成 7 年 角川書店
- ⑬ 「古代山城」『吉備考古論考集』葛原克人 2011 年 吉備人出版
- ⑭ 『改修 赤磐郡誌全』岡山県赤磐郡教育会 昭和 55 年 大真屋書店
- ⑮ 天理図書館善本叢書『日本書紀纂疏 日本書紀抄』昭和 52 年 天理大学出版部

連載＝四国八十八ヶ所めぐり

「歩き遍路の旅」 9

会員 樋口俊介

菩提の道場 (伊予の国) その1

40番(観自在寺)～65番(三角寺) 合計
26ヶ寺(愛媛県)

旅も半ばを迎え、菩提の道場(伊予の国)へ。
札所間の距離が2番目に長い第43番(明石寺)
から第44番大宝寺を打ち、
難易度が高い方の第45番(岩屋寺)を終え
ると、いで湯の里である道後も直ぐに近い。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を
分かる範囲で説明と、歩き遍路中の出来事等を含
めて書き、必ず最後まで歩き通します。

第31回

平成23年1月10日(月)～1月11日(火)
新春の南予を歩く(一本松～畑地)

歩き(ウォーキング遍路) 札所1ヶ所
1泊2日 約35km

40番(平城山) 観自在寺「かんじざいじ」

所在地＝愛媛県南宇和郡愛南町御荘町 平
城2253-1

電話＝(0895)－72－0416

開基＝弘法大師

宗派＝真言宗大覚寺派

本尊＝薬師如来

○平城天皇の勅願により、弘法大師が開基。

1本の霊木から本尊の薬師如来と脇侍の阿弥陀如来、十一面観音の3尊を刻んで堂宇に安置。平城天皇の髪を納めた五輪の塔がある。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

筆者紀行

○一日目は宇和島で昼食して、前回歩いてきた一本松から内海支所までの約17kmを歩く。

家を5時56分出て、山幸発7時15分のバスに乗り倉敷を経由して、早島ICに上がり西予宇和ICで下りて、今日の目的地で前回に歩き終えた一本松へ、当日の参加者は30名でした。

バスで約4時間30分も走り、ようやく到着するも直ぐに宇和島市内で昼食を済ませる。

自分の感じでは此れまでに凄く歩いた様な気分ですが、今回の40番(観自在寺)近くがほぼ中間地点になるらしい、新ためて気持ちを引き締め歩き遍路を、楽しみながら前進あるのみ。

13時02分から歩き始める観自在寺は高台にあり、寺を囲むように町が広がっている。また、かつては延暦寺の荘園があった事に由来して、このあたりを御荘というそうです。



観自在仁王門の干支 第40番観自在寺

宿毛から旧宿毛街道を通り、しばらく田園風景の中やミカン畑を歩くが、国道56号を主として多く歩き、そして江戸時代の土佐藩(高知)と宇和島藩(愛媛)の関所跡近くも歩く(今回は伊予の関所跡)何時ものことながら沿線の方々の応援

や励まし、お接待等すべてが感謝です。

14時15分に40番(観自在寺)に到着する。仁王門の天井を見ると干支の絵が鮮やかに描かれた円形の板があった。この円板は、方位盤で町の文化財。平城天皇の勅願寺で、境内には天皇の遺髪を埋めた五輪石塔や「天皇の松」と書かれた松があった。

なお40番札所は、四国霊場の第一番札所「霊山寺」から一番遠い場所であることから、「四国霊場の裏関所」と呼ばれているそうです。

すぐに本堂と大師堂にお参り、心を込めて大きな声で読経とお願いをする。次へと14時45分頃から八百坂峠へと遍路道を歩く、その間は身体には優しく何と気分爽快に感じる。



宿泊のサンパー



八百坂峠

本日の目標地の内海支所には、17時30分に着く、あとバスでホテル(サンパール)へ直行する。早速にお風呂に入らせて頂き疲れを十分に癒して、夕食を楽しく美味しく頂きました。

あとは皆さんと和やかにくつろぎ、活発な雑談して23時50分頃に睡眠する。

よし明日も楽しみ元気で歩くぞ!!

なお本日の歩数は25,605歩でした。

○2日目は前日に歩き終えた内海支所から津島までの約18kmを歩く

6時20分に起床し朝食を済ませて、ホテルを7時25分にバスで出発し前日に歩き終えた内海支所へ、直ぐに準備運動等を行う。

7時51分から歩き出し柏坂峠へ歩く、国道56号(宿毛街道)を主に歩くが、柏坂峠に入る近くから遍路道になり身体には優しく疲れが和らぐ、内子で少し休憩してから再度歩くも、しかし登り

は急斜面で大変でした。

柏坂峠を中心に上り下り付近には野口雨情の歌が書かれた看板があり、感銘し心が和みます。



柏坂峠の遍路道



野口雨情の歌

【「野口雨情」(1882-1945)63才没昭和18年に愛南町に10日程逗留し、地元の人達と交流する。その際に20位の歌を詠んだ。その中から8つを選んだ(平成になってから)】

頂上は470m(海拔)で見晴らしの良いところ(「つわな奥」と書いた看板あり)で、気分爽快です、少し休憩を取り疲れが一変に飛んでしまった感じ、なお、下りは穏やかで楽でした。

再度国道56号を歩きオレンジロードの途中から小雨が降り出し傘を差して歩き、今日の目標地に13時31分に到着する。

バスに乗り一路岡山へ倉敷を経由して、我が家には19時45分に帰宅する。本日も楽しく元気で歩け家族に、自分と、皆さん全てに、感謝です。



柏坂峠の頂上



国道56号近くのロード

「つわな奥」は地名で、つわぶぎが多く自生している所という意味の様 つわぶぎ=つわな

なお本日の歩数は26.167歩でした。

合計約35kmで51.772歩です。「1日目25.605歩」「2日目26.167歩」

第32回

平成23年2月7日(月)～2月8日(火) 伊予の国 菩提の道を歩く(畑地～佛木寺)

歩き(ウオーキング) 遍路 札所2ヶ所
1泊2日 約34km

41番(稲荷山) 龍光寺「りゅうこうじ」

所在地=愛媛県宇和島市三間町戸雁173
電話=0895-58-2186

宗派=真言宗御室派
開基=弘法大師
本尊=十一面観音菩薩

○狛犬2頭が仁王像に代わって出迎えてくれる。もともとが稲荷神社だったとの、ことで地元の人々からは「お稲荷さん」と呼ばれ、親しまれている。五穀豊穡の神様・稲荷大明神は、本尊とともに祀られている。

◎十一面観音菩薩について

観音菩薩は姿を変えて衆生の願いに答えてくれるという。多くの面は、救済の多様性を表している。

42番(一環山) 佛木寺「ぶつもくじ」

所在地=愛媛県宇和島市三間町則1683
電話=0895-58-2216

宗派=真言宗御室派
開基=弘法大師
本尊=大日如来

○大師はこの場所こそ、仏教を広めるにふさわしい場所だとし、楠で大日如来を刻み、宝珠を眉

間に納めた。緑におおわれた本堂は、吉田藩主伊達公の建立と伝えられ、シンボルともいえる「茅葺き屋根の鐘楼」は300年の歴史を持つ風格があり、稀少価値が特にある。

◎大日如来について

真言密教の中心となる仏で、宇宙のすべての現象は大日如来の徳によるものという。他の仏の徳も大日如来の一身に帰する。

筆者紀行

○一日目は前回歩いてきた津島から龍光院までの約17kmを歩く

山幸発7時15分発のバスに乗り、倉敷を経由して本日の参加者は37名で瀬戸中央道の早島インタで上り途中で休憩を取り、西予宇和ICで下りて、直ぐに宇和島市内の国道56号線沿いの真珠会館(レストラン宇和島)で昼食をする。

バスで先月に歩き終えた津島に戻り、注意事項の説明を受け、簡単に身体をほぐす準備運動を各自で行い気持ちも体も整う。



別格霊場第6番龍光院 馬目木大師でも御参り

13時05分から歩き始め、途中の馬目木大師では御参りする。四国での海洋レジャーの拠点ともいえる足摺宇和海国立公園に沿って進む。

遍路で望む内海湾では、静かな海に並ぶ真珠貝養殖のブイが見られる。2回のトイレ休憩を行ない龍光院(別格6番)には16時55分着く。

遅くなったが門が開いていたので、先達さんと37名で気持ちを込めて御参りする。境内を出てバスが停車しているところまで、暫く歩きバスで17時56分宿泊のホテルへ。

名前は宇和島第一ホテルで豪華に感じるが、実

は大浴場はなく（現代風か？）直ぐには入れず、各部屋で風呂の湯加減を調整してから、入る様になっているので先に夕食する。

各人が各部屋の風呂に入り、あと一室に集り、8人で酒、ビール等を酌み交わし雑談し話がはずみ0時30分頃に睡眠する。

なお本日の歩数は27.185歩でした。

○2日目は前日に歩き終えた龍光院から齒長地蔵までの約17kmを歩く

6時10分に起床し朝食を行い、7時47分にバスでホテルを出発する。前日に歩き終えた龍光院（別格6番）で下車し、軽い体操で身体をほぐして体も気持ちも十分に整える。

7時58分から歩き始め龍光寺へ向かう、子供さんが家の中から手を振ってくれたり、中学生の女子生徒が通学途中に頑張ってくださいと声かけて手を挙げてくれる。

この元気なパワーをもらい疲れや体の痛いところ等は無くなる感じです。有り難う！四国の皆さんに感謝です。！！

門前のひなびた情景を堪能し第41番（龍光寺）には10時15分に着く。



第41番 龍光寺 第41番龍光寺に行く途中



「龍光寺」は、寺だというのに赤い鳥居が遠くから目立っていた。なぜだろう？と思って調べてみると、元々は、稲荷神社だったそうで、お寺に入ってみると稲荷神社が祀られていた。

そのため、今も地元の人々からは「三間のお稲荷さん」と呼ばれ、商売繁昌や開運出世を願う人が多いそうです。

龍光寺の門前には「長命水」という、うどん屋

さんがあり、そこで食事をした人には、空いたペットボトルに屋号の由来になっている「長命水」を入れて貰えるそうです。今回は残念ながら立ち寄る事が出来ず次回を楽しみに。

早速に本堂と大師堂では37名全員が大きな声で読経し大変に活気があり元気を貰いました。

10時48分に出発し次の42番へ歩く龍光寺からはほど近く、3kmくらいの距離にあり田園風景の静かな中の札所で茅葺きの鐘楼堂が印象的である。

寺の近くまで来て、先にバスで近くの和風レストランに行き昼食をする。再度歩き終えた所にバスで帰り、そこから10分くらいで42番（佛木寺）には12時50分着く



第42番佛木寺



齒長峠の由来看板

入口の仁王門は2階建てで、とても立派です。境内の鐘楼堂は元禄年間（1688～1703年）に建てられたもので、四国霊場では唯一の茅葺き屋根の鐘楼堂だ。たしかに、茅葺き屋根って、四国のほかのお寺では見られない光景だと思う。

風情があって凄くいい感じ、本堂も歴史を感じさせる造りでした。厳かに本堂と大師堂で全員が心をこめて読経し、お願い事をする。

あと準備を整え気持ちを引き締めて、次へと13時32分に歩き出す、途中にトイレ休憩を1回とり約2時間歩くが、その間でも温かい声援そして自然の風景や心地良い風、のどかな雰囲気を感じ、満喫しながら歩ける事が最高です。

本日の最終の目的地である齒長地蔵に15時35分到着する

バスに乗り一路岡山へ15時41分に出発し西予宇和 IC に上り早島インタで下りて倉敷を経

由して、我が家には21時20分に帰宅する。

気分良好で疲れなし！！家族に感謝！皆さんに、自分に感謝！有り難う！

なお本日の歩数は27,466歩でした。

合計約34kmで54,651歩です。「1日目27,185歩」「2日目27,466歩」

第33回

平成23年3月7日（月）～3月8日（火）伊予の小京都へ（佛木寺～大州）

歩き（ウォーキング）遍路 札所1ヶ所
1泊2日 約32km

43番（源光山）明石寺「めいせきじ」

所在地＝愛媛県西予市宇和町明石201
電話＝0894-62-0032

宗派＝天台寺門宗
開基＝天澄上人
本尊＝千手観音菩薩

○地元の人々から「あげいしさん」と呼ばれているのは、美しい女神が願掛けのために深夜に大石を山の上まで運びあげていたという伝説に由来している。弘法大師が修行した「弘法井戸」「しあわせ観音」など見どころも多い。

◎千手観音菩薩について

千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼をもつ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救済する。

筆者紀行

○一日目は前回歩いてきた齒長地蔵から宇和町久保までの約17kmを歩く

家を5時50分に出て、山幸発7時13分に乗り両備バス倉敷を經由して、本日の参加者は31名で、瀬戸中央道に上り児島インターを通過して今日の目的地へ、何時もより車が少ない様で予定

通りに走れた。

前回歩き終えた齒長地蔵には11時15分に到着する。準備を済ませ当日の予定の説明を受けてから、11時25分から歩き出し、途中で1回のトイレ休憩を行い12時45分に43番（明石寺）に到着する。

境内全体が緩やかな丘陵で、豊かな緑に包まれている。札所からJR予讃線卯之町駅付近に向かうと、江戸末期の風情が残る町並みがある。

明石寺は、「めいせきじ」と読むのだが、地元の人々からは「あげいしさん」と呼ばれ親しまれているそうです。

赤い屋根瓦の仁王門は珍しいなあと思うたら、本堂の屋根も赤瓦だったので、お寺の方にその理由伺ってみた。「冬には雪が積もるので、屋根瓦は寒さに強い石見瓦にしているんです」山間での四国は雪が多いようで、なるほど雪対策だったのか、先人の知恵の深さと凄さに感心する。



第43番 明石寺

見事な夫婦杉

このお寺でビックリしたのが、本堂の賽銭箱が床に埋め込み式になっていたこと。盗難防止のためだろうか？それとも他の理由かな？

なお愛媛で「タルト」といえば、ゆず味のアンコ、栗入り（一六タルト）等のお菓子の事らしい。

本堂と大師堂で気持ちを込めて、31名で読経をすませ、先達さんから寺に関する詳しい説明や由来などの話を聞く。

あとバスで近くのレストランに行き昼食をする。（12時50分～13時30分）折り返し明石寺に戻り準備をして、14時05分から次へと歩き出す、宇和加茂局の前を通り今日の目標地である

宇和町久保に16時53分に到着する。

バスで宿泊先（松屋旅館）に行く、着いて部屋別になり3名が同部屋となる。しかし松屋旅館は古い老舗旅館で昔は、前島密（郵政の父）、新渡戸稲造、（元国連事務総長）その他多くの著名人が、お泊りなられた由緒ある旅館で超有名ですが、設備面が行き届かず（保存のため）改造出来ず、昔のまままで維持されているそうです。

早くお風呂に入りたいと思いきや、此処は各部屋にバス、トイレなし、大浴場、部屋の鍵なし、冷蔵庫、売店なしで、1ヶ所にシャワーが有るだけで、やむなく順番に行く。



松屋旅館 屋旅館に宿泊著名人（一部）

何だか 疲れが取れないように感じるが、しかし最高の思い出になる伝統ある旅館に宿泊で来たことが光栄でした。

夕食を美味しく頂き、あと部屋で10人の方々と各自の思いや、政治、経済等いろいろな事を話し大いに議論した。 23時40分頃に睡眠。

なお本日の歩数は26,840歩でした。

○2日目は前日に歩き終えた宇和久保から十夜ヶ橋（永徳寺）までの約15kmを歩く。

5時50分に起床し朝食を済ませ、7時25分にバスで出発し、前日に歩き終えた宇和久保に7時40分に着き、十分な準備運動、昨日の事があるので、気持ちの切り替えを行い、軽い準備運動をして7時50分から歩き始める

国道56を北に進み北只を過ぎ、かなり狭い鳥坂トンネルを通り、歩きつづけるが、歩道を歩く人、すれ違いの人々から、頑張れ、身体には気をつけて等の励まし言葉を掛けてくれる。四国の皆

さんの温かさや励ましには常に感謝です。

大州市街に入る。明治時代の町並みが残り、テレビドラマ「おはなはん」のロケに使われたおはなはん通りを通過して、バスで近くの店に行き昼食をする。再度しばらく歩いて番外札所十夜ヶ橋（永徳寺）に13時55分に到着する。

○十夜ヶ橋（永徳寺）についての説明を。

この地を訪れた弘法大師は、この辺りの民家に宿を請うたが、ことごとく断られてしまった。

仕方がなくこの十夜ヶ橋の下で野宿をした際、空腹のあまり一夜も十夜の長さを感じたという。

「行きなやむ 浮き世の人を通さずば 一夜も十夜の橋と 思ほゆ」

と大師が詠んだ歌から、この橋の名が付いた。

ところで、遍路たちは橋を渡るときには金剛杖を突かないというルールがあるが、これは、橋の下の大師の眠りを妨げないためである



十夜ヶ橋 十夜ヶ橋永徳寺の説明

十夜ヶ橋の下と永徳寺で念入りな、御参りを済ませて14時01分に帰路岡山へ、内子五十崎ICに上り児島ICを通過し、早島インタで下り倉敷を経由して、我が家には20時35分に帰宅する。少し足の痛さはあるが気分は良好だ、

自分の身体に感謝！家族に感謝！有り難う！

なお本日の歩数は25,674歩でした。

合計約52,514歩です。「1日目26,840歩」「2日目25,674歩」

※前回の（きび考）第10号で第二部の「修行の道場」土佐の国 24番～39番（16ヶ寺）が終わり、今回からは第三部の「菩提の道場」伊予

の国 40番～65番(26ヶ寺)をあるきます。
次は讃岐の国へと歩き続けます。どうぞ宜しくお願いします。 **まだまだ続きます！！**

「私の歩き遍路」

特別寄稿 重康邦夫

樋口会員の連載「歩き遍路の旅」の感想を兼ねた紀行文を戴きました。重康氏は長船で「歩く会」を立ち上げられ、私(編者)も参加させて戴いた、ご縁で”きび考”の読者の一人として特別寄稿を戴きました。

“きび考”9・10号を送って戴き有難うございました。到着した日から就寝前に1時間程度ずつ読ませていただいておりますが、読み終わるのはこれから10日以上かかりますので、とりあえずお礼を述べさせていただきたく筆をとりました。……まだ2割程度しか読んでいませんが、「私の妻は四国遍路をしています、般若心経を誦んじるだけでなく……」というくだりを見つけてほっとしました。

今から約25年ほど前なので、私が40歳後半から50歳前半にかけての頃のことですが、高校の教員仲間4人で夏休みと冬休みに3泊4日ずつ11回かけて、四国八十八ヶ所の歩き遍路をしたので、四国八十八ヶ所という語句を見つけると、ビビビ・・としびれる感覚になります。その次にしかし私は般若心経の教本を見なければ唱えることができなかつたと反省してしまいます。

次に私たちが立ち上げている「歩く会」が坂根登山口→熊山遺跡コースで、4月にウオーキングの会を開催し、遺跡研究家の岡野進さんに遺跡とか、秦氏のことを教えていただいたので、9号・10号の山田良三さんの「吉備と秦氏」、井上秀男さん「熊山遺跡について」、丸谷憲二さんの「熊山遺跡とバアン仏教遺跡」については岡野進さんに頂いた資料と読み比べながら、じっくり勉強させていただきたいと思っております。

そんなわけでとりあえず、樋口俊介さんの「歩き遍路の旅」についてだけ感想を続けさせていただきます。

前回に頂いた資料では四国遍路の一番の難所とされている、徳島県日和佐町にある23番札所薬王寺から高知県室戸岬にある24番札所最御崎寺までの85キロを1泊2日の2回で歩ききったと書かれているのを読み、私たちより数段上だと感じました。

私たちは車で乗り合わせて出発点まで行き、車を預け、4日目に最終点から出発点までタクシーでかえるという方法だったので、難所の85kmは歩いていません。10号に書かれている、歩き20km札所0ヶ所、1泊2日歩き37km札所0ヶ所の記録を読ませていただいて、強い決意で歩かれていることを感じました。また私たちの誰かが日記に書き残しているかは確かめていませんが、私は88ヶ寺のお経の受領印をいただいて掛け軸をつくることに気がとられ、記録を残さなかったことを残念に思っています。

一つだけ覚えていることは、昭和62年の夏だったと思いますが、室戸岬から西へ西へと、太平洋の波を眺めて歩いた時、「この美しい景色を詠んだ俳句を作り夕食のとき披露しあおう」と提案する者があり、甲子園で関西高校快進撃ベスト8進出す放送を聞きながら頭を悩ましたことを覚えています。どんな句をつくったかは覚えていませんが、4人とも次の日は「今日も」と言い出す者は居ませんでした。

樋口さんはすでに30回四国に出かけられ頑張られたわけですが、やっと半分というところだと思います。樋口さんの記録はこれから遍路を目指す人の道標(みちしるべ)になると思いますので健康に留意し頑張ってくださいることを願います。

宇喜多氏から備前池田氏へ の展開

会員 井上秀男

① 周匝佐々部氏と安芸の佐々部氏の資料 について

私の故郷の赤磐市周匝に茶臼山城と呼ばれている山城がある。津山市から流れる吉井川と美作市林野から流れる吉野川との合流する場所である。標高 180m頂上に登ると周匝平野を南側に北側には飯岡地域を一望できる。月の輪古墳・美作後南朝9代良懐(よしやす)親王の墓(我王の墓)とも呼ばれている遺跡や、万葉歌人の平賀元義の開設した楯之舎塾の場所も見える。

この周匝の地は美作国と備前国を結び交通の要路であり、国境の要所であった。この城の築城時期は不明であるが、備陽記巻八に赤坂郡の内古城跡の中に見られ、また備前軍記の中に「赤坂郡周匝の城に佐々部勘齊籠城し……」と見られる。その他天神山記にも城主佐々部勘之丞父子……として文献資料にある。

この茶臼山城は天文2年(1533)に佐々部勘齊貞利が居城し天正7年(1579)に宇喜多直家に攻められて落城する。享禄5年(1532)に浦上宗景が和気郡の天神山に城を築いて勢力を拡張し備前東部や美作地方の有力な諸氏は浦上宗景に属する者が多かった。天文元年(1532)頃から出雲の尼子氏が美作方面に侵攻を始め天文13年(1544)と同22年美作西部への大侵攻があったが、浦上氏の勢力に制圧されて前進することが出来なかった。しかし、その浦上宗景も家臣であった宇喜多直家が勢力を強めてきて、天正3年(1575)9月和気郡の浦上宗景の居城の天神山城を攻めて落城させ、美

作方面への侵攻が始まる。今まで浦上宗景の家臣や備前北部美作地方の有力諸氏は、美作の三星城主の後藤勝基を盟主にして宇喜多直家に抵抗する者もいた。

その中に周匝の茶臼山城の佐々部勘齊貞利がいた。宇喜多直家は天正7年(1579)2月に、美作へ侵攻する手始めとして、家臣の花房助兵衛職之・延原弾正景光、その他の諸氏によって侵攻し佐々部勢は敗れ落城する。佐々部勘齊貞利の墓地は茶臼山城の裾野に息子の仙千代の墓と一の谷と云う場所に葬られて居る。この佐々部氏の墓地に広島県(安芸国)から子孫の方が墓参りに来られている。

私は以前に、茶臼山城主の佐々部氏について調べたことがあり、その文献資料として『日本城郭全集』の広島県内城郭の中に、広島県高田郡高宮町佐々部に牛首城があって、佐々部氏の居城で本丸、三の丸、居館などの七段からなる郭(くるわ)を有する山城があります。また、同郡高宮町佐々部に面山(めんざん)城があって、佐々部氏の居城で丘陵上に八段の郭を有し山腹に居館があると記されている。

広島県高田郡に佐々部と云う地名があるので、この地域の有力な土豪として毛利との関係があったと思われる。佐々部氏の関係文献として、『萩藩閥閥録』のなか(八十八)に毛利の家臣宍戸元源から佐々部兵部少輔祐賢に宛てた感状文で、内容は安芸国宮崎にて尼子詮久(あきひさ)と合戦して高名をあげたという文面であり、天文9年(1540)12月18日日付の書面、もう一点は備後国三谷郡高杉城切崩しの時に功労があって、佐々部兵部少輔祐賢に宍戸安芸守隆家から宛てられた文書で、天文13年(1544)8月10日の日付があり、次に天正3年(1575)1月23日毛利勢は備中鬼身城(現総社市)を攻める。中島元行、三村親成を案内人として鬼身城を取り囲み、守っていた城主の上田孫次郎実親(さねちか)も力尽きて切腹し落城する。

天正4年(1576)から鬼身城は毛利の勇将宍戸

安芸守隆家が在番した。その後宍戸隆家の嫡子左衛門佐元秀(すけもとひで)の子息宍戸備前守元継が城主になり八万石を領した。慶長5年(1600)関が原の合戦後に廃城となっている。天正3年(1575)に鬼身城を毛利氏が攻めた時に佐々部氏も参戦し功労があったので、宍戸安芸守隆家から、佐々部美作守家祐に宛てた文書として残っている。鬼身(上田氏)被官己下分補仕候……と『萩藩閥閥録』の文書に、天正5年(1577)8月19日の日付が記されている資料です。

周匝の佐々部氏と安芸国の佐々部氏についての繋がりの方に、今一步調査する必要があると考えている。

現在のお城



茶臼山城の遠景(筆者撮影)

② 宇喜多氏の盛衰

宇喜多直家は天正7年(1579)佐々部勘齊貞利が居城する。周匝の茶臼山城を落城させて、次に飯岡の鷲山(わしやま)城の星賀藤内光重が討たれ、次に海田の鷹巣(たかす)城(現在の三咲町)の江見氏、次に美作の三星山城の後藤勝基も落城する。

県南の児島地区では天正9年(1581)4月に毛利氏と宇喜多氏と八浜合戦が起る。備前・備中・美作において合戦が行われている。天正5年頃から織田信長は西へ勢力を伸ばそうとしていた。西から毛利氏の勢力があり、信長は毛利と同盟にある西播磨の上月城(兵庫県作用郡上月)の赤松政範を討

つことを決めて、総大将に羽柴秀吉を当て上月城の攻略に当たる。

天正10年(1582)毛利氏と織田信長の将羽柴秀吉との「備中高松の役」があり、その最中の6月に本能寺の変があつて、秀吉は毛利との和睦を結び天正10年6月4日清水宗治の切腹を見届けて「中国大返し」をして、明智光秀を討つ山崎の合戦で勝利して天下人となる。

天正10年(1582)から16年後の慶長3年8月(1598)63才で秀吉が死去する。慶長5年(1600)9月関が原の合戦があつて、徳川家康が石田光成を討つて徳川時代となる。備前国を支配していた宇喜多直家は天正9年(1581)に病死する。この時、息子の秀家は8歳で後を継ぐ。文禄・慶長の役に総督として出陣する。後の宇喜多秀家の所領は備前・美作・備中東半を合わせて57万4千石である。慶長3年5月、二回目の朝鮮出兵から帰国して豊臣家の五大家老に任命され重臣となったが、豊臣秀吉が慶長3年8月18日伏見城で死去する。その後関が原合戦で西軍側に属して敗北し、慶長11年(1606)4月八丈島へ流罪となり、50年を経て没する。

赤松・浦上・宇喜多氏と戦国時代の諸氏の栄枯盛衰を垣間見ることが出来る。

③ 備前池田氏の変遷について

宇喜多氏のあと遺領を継いだのが、筑前名島(現福岡市)の領主小早川秀秋で関が原の合戦で、論功行賞として、徳川家康から備前美作57万4000石の知行を給された。慶長5年(1600)備前国に入封したが、慶長7年(1602)10月に死去した。嗣子がいなくて断絶する。2カ年の在城である。

その跡に慶長8年(1603)2月備前国に28万石が姫路藩主池田輝政の二男忠継に、美作国に18万6500石が森忠正に与えられた。両氏は外様大名である。池田氏の由来については、遠祖は清和源氏の頼光で、これから4代目安政は鳥羽院の滝

口武者で、美濃国池田郡本郷村の出身であったから、池田右馬允と名乗り、その子孫は池田氏を姓とした。池田輝政の祖父恒利(つねとし)は江州滝川美作守貞勝の子息で、池田政秀の女婿となり將軍足利義晴に仕えていた。池田恒利の室は池田政秀の娘で法号を養徳院といい天文5年(1536)に織田信長の乳母となって厚遇された賢婦人であった。この中に生まれたのが池田信輝である。信輝は織田家を経て豊臣家につかえた。信輝の子息の池田輝政は徳川家康に仕えて、関が原の合戦にて並々ならぬ戦功を挙げて姫路52万石の給地を受けている。池田輝政は家康の次女富子と結婚して、池田忠継が生まれる。慶長18年(1613)1月25日、姫路の父輝政が死去し嫡男の利隆は姫路城に42万石の領主として帰る。

そして備前岡山に次男の忠継が配されたが、元和元年(1615)に17才の若さで死去する。その為に弟の忠雄が淡路から帰って城主となる。池田忠雄は岡山藩の中で御野郡南部の新田開発や邑久郡の神埼新堀の開鑿(かいさく)による千町川の治水、吉井川への田原井堰の築造、新田開発に尽力をしている。この殿様は小農民の農業経営が安定することを重視して、岡山藩政の基本造りを進めていたが、寛永9年(1632)5月21日病気で没す。この時点で忠雄の嗣子勝五郎(光仲)が3才の幼少であった為利隆の息子で鳥取藩主の池田光政との間で国替えの処置が取られ、光政は寛永9年(1632)7月16日に岡山城の受け取りを挙げる。その後、岡山藩主となった光政は政策として、国境および領内の重要な地域には家老及び侍大将等が配置される方針が取られ、備前と美作国の国境である赤坂郡周匝には2万2000石を給された池田家の老臣伊賀守長明の陣屋が設けられたのである。

④ 周匝(片桐)池田家について

初代は池田河内守長政で、池田紀伊守信輝の四男として天正3年(1575)に尾張犬山に生まれ9才にして片桐俊元の養子となる。故に片桐氏の称

あり、慶長2年(1597)に片桐俊元の死去に及び参州新庄にて7000石を領する。その後慶長5年関が原の合戦にて上杉景勝を討ちて功あり、1万5000石を加増せられ、播州赤穂城主となる。慶長8年(1603)に池田輝政が備前を領するに及びその執政としてこれに従って下津井城に居住する。この時に1万石を加増せられ、3万2000石を領す。

その後下津井城の改修・江戸・駿府の築城に従事するが、慶長12年(1607)7月20日江戸から帰途の節に伊勢国庄野庄にて卒す。行年32才、遺骨は下津井の円福寺に埋葬され、銘石と御霊屋を建て廻向料として高9石4斗が寄進されたが寛文元年(1661)銘石は鳥取と周匝に移され、御霊屋は寺に払い下げて除去され、寺領もいつの頃か召上げられた。池田河内守長政の遺骨は円福寺の境内に納められているとされていたが、周匝池田氏9代の池田伊賀守長貞の時、天保8年(1837)9月家臣に命じて池田河内守長政の墓地を掘らせてみたら、下津井の円福寺にも周匝の墓地にも遺骨が無かったとのことであった。この事跡については、池田河内守長政公の法名は「大龍寺殿本岳常心大禅定門」と諡されている。大正元年11月1日発行の赤磐郡誌の中に記されている。

次に二代目池田伊賀守長明は、長政公の嫡男として慶長11年(1606)児島下津井城に生まれ母は荒尾美作守善次の娘である。翌年父の長政公が死去し、2歳にして家督を相続するが下津井城は西の要所にて幼年の在城は難しいとして、城付1万石を返上して播州佐用郡平福に移して、諸士をこの地に残し、伊予国大洲城主加藤嘉明の許に養われ、8才の時播州竜野に移る。この地に居り元和3年(1617)に池田光政は因伯(現鳥取県)に32万石を賜り、これに移り転封する。池田伊賀守長明は伯耆八幡に封じられ、池田光政は再び封を備前岡山藩に移されて備前藩主とな



2代目池田伊賀守長明の墓

り、池田伊賀守長明は寛永9年(1632)周匝にて2万2000石を賜る。その後延宝7年(1679)日大坂にて卒す。行年73歳、墓石は茶臼山の尾根上にあつて、俗に空の塚(空の塚)と今でも呼ばれている墓地にある。写真の正面には「備前州老池

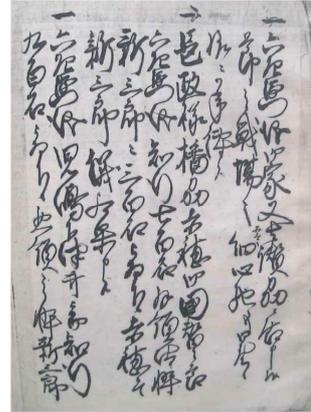


池田伊賀守長明の墓柱

田長明之墓」と刻んである。長明の法名は「高德院殿前伊州大守春峯景修大禅定門」とある。

⑤ 周匝池田藩士家臣先祖書上帳と那須家文書について

この資料は私が所有しているもので、周匝池田河内守長政の代から仕えた家臣の先祖奉公書上帳の記録で、重臣である波多野氏は長政公が慶長5年(1600)関が原の合戦に参戦した折に、波多野六左衛門が「御供仕候」の文面、慶長12年に駿河の城普請に行ったときに御供している

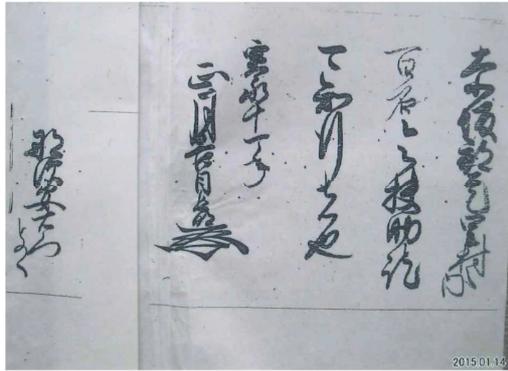


波多野氏先祖書(著者所有)

文面が見られ、延宝5年(1677)12月18日の日付で波田野与右衛門景任(花押)があつて、宛先を青木新右衛門殿としている。この波多野氏は下津井城にて9百石の知行を受けている池田家の重臣で、周匝池田河内守長明から波多野六左衛門宛ての手紙文が残っています。

『周匝池田家藩士先祖奉公書』の中には伊藤氏・高木氏・大澤氏・片桐氏等の先祖奉公が記録され初代長政公、2代長明と家臣の動向を知ることのできる資料です。

江戸時代には大名が自分の家臣に知行地(所領)を与える代わりに、家臣からの奉公を受けて御恩と奉公の関係であつて、周匝池田氏は備前岡山藩の上級家臣である。また周匝池田氏も家臣に知行地を与えて御恩と奉公の立場をとっている。岡山大学所蔵池田家文庫に岡山藩池田氏の家臣の奉公書上帳が保管されている。この池田文書の中に、周匝池田氏の家臣の那須家先祖由来書上の資料があり、天正年中から明治2年までの那須家の代々の先祖の書上で、池田光政が因幡・伯耆に在封していた頃に、その地で百石の知行を賜っている。光政がその後、岡山に移封してから那須氏は周匝池田長明公に仕え二代目那須安右衛門休孝が長明公から赤坂郡是里村の内、百石を知行として賜っている。寛永11年(1634)正月の日付の文書がある。



那須安右衛門が受領の書簡（筆者所有）

もう1通は文政10年(1827)8月1日赤坂郡是里村の内百石を9代池田伊賀守長貞から、那須惣右衛門正倫宛に知行宛行状がある(吉井町史代2巻245～246頁)に記されています。この知行地の是里(これさと)村はわたしが生まれた場所です。

那須家の知行状で最古の文書は、岡山移封になる前の元和5年(1619)で池田伊賀守長明からの知行状で「伯州八橋郡之内、丸尾村ニ而百石令扶助何畢全可領地者也」との文書であり、那須家は周匝池田家の重臣として普請奉行、周匝町奉行、側用人などを歴任している。那須家先祖由緒書上の資料は、今から30年ぐらい前に父が健在のころ、横浜から周匝の池田家の家臣の子孫の那須正彦氏が自分の先祖を調査される為に赤磐郡周匝の教育委員会を訪れて父の紹介を受け、先祖の墓地へ案内する等の交流の中で、那須家先祖由緒書上の資料を持参された時に、本人了解の上で、コピーを戴いたものです。

今から16年前に私宛に一冊の本と手紙が添えられていた郵便物が届けられたので、開封して拝読させてもらった。本の題名は『泉一次代への贈りもの』(岡山編)と表紙に書かれていた。内容は各界で活躍されている岡山県人37名の方々による自分の人生体験などについて執筆された平成10年に発行された本で、この中に送って頂いた那須正彦氏が執筆されていました。テーマは「父祖の地を索(もと)めて」(吉井川上流のアルカディア)本の文面の中に自分の祖先の那須家の調査された時の色々な人達との出会い、自分の先祖の那須家文書

が吉井町史の資料集の中に「那須正彦文書」として集録された時の喜び、私の父との出会い等について執筆されていた。

那須氏が先祖の調査にこられた頃、吉井町史が編纂されていた時期で、委員長に吉田晶先生、編纂委員で近世史専攻の倉地克直助教授(当時)その他の諸先生によって町史編纂が行われ、その頃、父も元気で専門調査委員として活動していた関係から、那須家墓地のことも知っていたので那須氏を墓地に案内した。その時に那須氏は先祖の墓石の前で暫く拝されて、いとおしく墓石を手で触れられていたのが印象に残っていると父が話したのを今でも覚えています。

その後平成3年3月吉井町史1～3巻が完成し父も町史編纂の協力者の一人として喜んでいました。その後平成6年12月25日父が没した。那須正彦氏から送付して貰った本と、手紙は大切に保管している。その時の手紙の文面に「お父様の霊前にお供えいただければ幸いに存じます」と一筆書いてあり私は仏壇へ贈呈していただいた本と手紙を供え父に報告した。那須正彦氏からの一筆の手紙が大変嬉しかった。(下の写真)



那須正彦氏のプロフィール

昭和3年生まれ 昭和28年東大経済学部卒

昭和28年さくら銀行入行 平成5年明海大学経済学部教授 経済学博士 著書に『現代日本の金融構造』等
今年87歳になられる。今年頂いた年賀状にて元気にされている様子であった。

⑥ 下津井城の歴史と城主について

瀬戸内海に面した下津井湊の近くの小高い丘80

mくらいの位置に下津井城は築かれている。備前児島と四国讃岐間の最も近い南北交通・東西交通への船での、物資の輸送等の要所である。特に航路が児島の南を通るために軍事上・経済上の重要視された場所である。

下津井城の歴史として天正から慶長5年頃までに宇喜多秀家が砦のようなものを築いていたとされている。宇喜多家は関が原の合戦で破れ、秀家は八丈島に流されそこで没す。秀家の次に小早川氏が入封し、下津井城代として平岡石見守頼勝が任命され入城して城の改築をするが、小早川が没して次に慶長8年(1603)池田信輝の四男の池田河内守長政が3万2000石で下津井城主として入る。

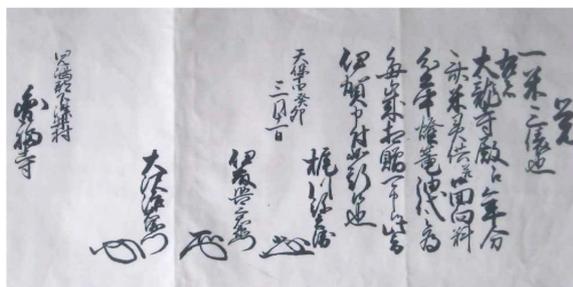
長政が本格的に下津井城に入るまでの間、家臣の岩田源介貞勝が采配して守っていたとされ、池田河内守長政は平岡石見守頼勝の下津井城の改修工事を受け継いで慶長11年に完成している。翌年の慶長12年に駿府城の普請に出役して病気になる途中伊勢国庄野庄にて死去し、遺骨は児島円福寺の境内に埋葬されたとしている。没後の下津井城主には嫡男の新吉(池田伊賀守長明)とされたが幼少のために在城は無理とされ、池田由之(よしゆき)が播磨佐用城から下津井城に慶長14年(1609)2月に城主となり、その後荒尾但馬守成房が禄高1万石で入封して13年間在城する。

元和元年(1615)諸大名の軍備縮小に為に幕府は一国一城制を定められたので、寛永2年(1625)荒尾成房は隠居して子息の荒尾但馬守成利が城主となる。その後寛永9年(1632)に池田出羽守由之の子息が国替えによって着任する。

そして寛永16年(1639)城主出羽守は天城の陣屋へ移る(倉敷市藤戸町天城)所領は3万2000石、これより下津井城は廃城となる。徳川幕府の政策によって築かれた下津井城も、結果的に幕府の政策によって廃城になる皮肉なものである。

下津井城の文献資料は、児島の郷土史家、山本慶一・角田直一・大谷壽文・多和和彦・高木恭夫氏等の研究資料、文献があり今回参考文献とさせて戴いた。

⑦ 下津井円福寺と円福寺文書



円福寺へ池田河内守長政の供養料として送られた(覚)の文書

円福寺は潮音山円福寺福昌院、児島霊場34番札所で薬医門を入ると正面に本瓦葺き入母屋造りの大きな本堂がある。内部には本尊の阿弥陀如来が観音、勢至の菩薩を従えて祀られている。文化7年(1810)下津井城山の西麓から移転したと伝えられ本堂の右脇にある観音堂には初代下津井城主池田河内守長政と下津井城で死去した2代目城主池田出羽守由之の室の供養の為に寛文10年(1670)に建てられたものです。円福寺は下津井城主の菩提寺である。円福寺の(覚)文書の中に周匝の池田家陣屋から円福寺に池田河内守長政の供養料として送られた文書が残っている。

文書の内容は「(覚)米三俵也右者大龍寺殿江年分齊米(ときまい)霊供、並御廻向料 盆中灯籠油代之為 毎歳相贈可申下此旨 伊賀申付如斯下也」天保 14年(1843)3月11日梶川弥兵衛伊藤与三右衛門好謙 大沢次右衛門 3名の連署、花押あり。周匝池田氏の家臣で延宝5年の年(1677)池藩士先祖奉公書上帳の中に見える諸氏である。この文書の伊賀申付・・・とあるのは、周匝池田氏9代の池田伊賀守長貞、35才の頃と考えられる文書です。

それともう一点、「上田三反、上嶋二反此高9石4斗之分御寺領として御遣候素多年可遂候而取用者也」 巳2月18日 岩田源介貞勝書判、下津井

円福寺との文書です。岩田源介貞勝は下津井城に池田長政に仕えていた重臣である。

今回周匝の茶臼山城の戦国期における状況から始まって岡山藩の池田氏、周匝池田との関係、池田氏の家臣の動向を知ることが出来た。

諸氏の祖先の祖先奉公書き上げ帳の資料を通して藩主と家臣の関係、徳川幕府の政策の中で諸藩及び家臣達の歴史を観ることが出来た。

参考文献 日本城郭大系 吉井町史（2巻）
那須家史料 下津井城誌 岡山市史
和氣郡誌 泉＝那須正彦共著

“ねぶた”を訪ね一人旅

会員 濱手英之

皆さまあけましておめでとうございます。本年もご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。昨年を振り返ってみますと、多くの遺跡、神社、仏閣等ご案内いただいたり、行ってみたいしました。2月にイタリアに行ったおりも、時間があると遺跡や、教会等多く見ました。遺物を拝見するのも良いですが、その説明板等あれば、興味深く拝見します。やはり、行ってみないとわからないことも多く、見聞が広まると思います。

私は、薪のストーブを販売、設置等している関係で冬場は忙しく、夏頃は比較的時間があります。そこで昨年は、思い切って青森県のねぶた祭りを見学にいきました。クルマにて一人で向かったのですが、高速代を浮かすためできるだけ下道を通して、3泊程の強行軍にて3000km程走りました。



青森市の薪ストーブ屋さんウッドラックにて

小学生時代、雑誌の付録についていた、全国のお祭りを書いたカレンダー？に、ねぶた祭りは出ておりました。子供心にいつか必ず観に行こうと決めて40年ほどかけて実現したことになります。何事も強く念じれば叶うものだと思います。

そういえば今回のもう一つの目的に、青森市の薪ストーブ屋、ウッドラックさんに行ってみたくというのがありました。こちらの相馬さん、石村さんはフェイスブックにて知り合った仲ではありますが、大変気になる魅力的な人達です。私は東京での学生時代から馬の合う友人に東北出身の人が多く、その優しく素直な人柄にはいつも敬意を払います。





ねぶたを見る当日の昼頃、三沢のTさん(FB友達)にどうしても会ってみたいと三沢に向かう。時間的に今晚しか、ねぶたを見る事が出来ないと思うので気が焦るが三沢に行く機会は今日しかな!! 道は比較的空いているのだが、青森市内から三沢まで30分はかかる。米軍基地で有名な三沢。急いで高速?を使い、市内に入る。ここは米軍基地のある街だ。基地の前は素晴らしくおしゃれな商店街があり、まるでカリフォルニアの町にでも彷徨(さまよ)い込んだかのような錯覚も覚える。

じっくりあちこち見てみたいところだが、ざっと素通りしてTさんの会社にお邪魔する。なんと、いつもPC上で見ているのと同じ風貌の方が動いてしゃべっている。←あたりまえだ。有難いことに、新しい工場の施設の見学をさせていただき、知人もご紹介下さる、よかった、よかったと、急いで青森市に戻る。帰りは、思ったほどの渋滞はなく何とか車で市内に滑り込む。ネットでいくら探しても空いていなかった青森市内のホテルもなんと、リーズナブルで綺麗な一等地のホテルが確保できた!! 宿の手配ができたのでしっかりねぶたは堪能できそうだ。しかし、タッチの差で交通規制にかかってしまい、ホテルの駐車場にはたどり着くことが出来なかった。



ウッドラックすぐ裏の斧懸神社鳥居

ねぶた祭りに関してはお祭りの通りである。なんとも熱いお祭りで、「らっせーらーらっせーらー」の掛け声は、今でも耳に残っている。東北人の熱さを身体の芯から感じる事が出来る。企業対抗?の、ねぶたも見所満載だ。印象に残ったのは、ヤマト運輸の掛け声だ。ユーチューブ等で検索してほしい。若者中心に一体になって練り歩くさまが一番印象に残った。青森ねぶたは5日間開催されるという。次回来れたら是非「跳人」なってみよう。身体がリフレッシュすること間違いない。



白山比咩神社の奥宮

翌日には出発し、新潟まで下道を急ぐ。青森では、岩木山神社、陸中国の駒形神社、越後の居多神社、加賀の白山比咩神社、若狭の若狭彦神社等多くの神社も周れた。多くの一宮を周ることができ達成感もある。できれば、生きている内にすべての

一宮を参拝したいという思いが強くなる。そのためには歴史の勉強もだが、仕事もしっかり打ち込まねばなるまい。目標があるのは良いことだ。勝手を許してくれた妻に感謝して筆を置く。

「語り部」として記紀に残した。一方多くの民衆は芸能として楽しみながら、専門職の能や狂言師に自分たちの誇り高い歴史や当時の様子を託し発展させ、伝統芸能として立派な芸術に仕上げた。

口伝から読み書きに移す懸命な努力の積み重ねが、漢字を日本流に導入した。(飛鳥奈良時代) 先ず中国の漢文に「返り点」や「レ点」を付けて、日本語の読み見下し文とした。私はこれらの工夫は時代が下って開発されたものと信じていたが、実は律令社会に入り文字を導入する当初からの発明と知って、先人の知恵の確かさに改めて驚き感動した。

万葉仮名から平仮名に発展し、後に女流文学の世界が平安朝に開花します。文字のイメージの通り「ゆっくりした話しぶり」で「奥ゆかしく」「女らしく」を演じていました。当時の庶民の使っていた言葉は見えにくいのですが、万葉集には詠み人知らずの和歌が多数登場します。若い兵士や見送る妻の哀歌が感動を呼んでいます。

公式には和風漢文を作り、読み下しの工夫もしています。お経を誦んじながら難しい経典を学問として多くの若者が学びます。学びのレベルで昇進が変わります。出自よりも実力の社会でした。仏教と儒教を国体の基礎に置き道教は神祇の祭祀に取り入れました。神と仏と儒教がこの国の柱になったのです。

公家社会の言葉が平安の長い年月をかけて、京言葉として庶民に定着し、ゆっくりした滑らかな雅(みやび)の文化が言葉にも表れます。庶民は「一所懸命」に土地を開拓し精魂込めて耕作します。苦勞が報われる社会でした。やがて武士の台頭を迎えます。

注記 公家は武家に対する貴族一般の表現で、公卿は

素人のざれごと(戯れ言)

『日本語で生きよう!』(2)

Q=女子中学生の素朴な好奇心

「日本語のことをもう一步知りたい」

A=古稀老人の願い

「日本の魅力を日本語で学ぼう」

会員 山崎泰二

13. 日本語文字の導入から今日まで

先にも述べましたが、文字の無い世界では「口伝と歌舞」で先人の経験や知恵を蓄積し伝達した。具体的には農耕中心社会の中から自然崇拜、先祖祭祀が始まって、家族や所属集団の祝い事や神事・葬祭を儀式として、楽しみ、時に悲しみながら子孫に伝授してきた。

特殊才能を持つ口伝者は、見て(視覚)音を聴いて(聴覚)暗記し身近なものに託して覚え

天皇(国家)から三位以上の爵位を受けた貴族

の尊称

地方の武人が中央に集まります。お国訛りが横行します。皆さん『平家物語』や『源平盛衰記』でご存知の貴公子＝源義経が育った東北弁で「まんず、えがったナアー」としゃべると、公家衆だけでなく京人は驚きます。また木曾義仲が信州（長野）の山の中から京に出て、乱暴狼藉をしたと伝えられていますが、私は単に「信州訛り」が民衆に伝わらなかっただけだと思います。ゆっくり型の都人（みやこびと）にとって、武士は「荒くれ」と映ったのでしょう。当時の話し言葉は能や狂言などに垣間見ることが出来ます。生活や生き様を喜怒哀楽の表現で演者も観客も楽しんでいました。当時の読み語り本を、散文調で叙事詩的な物語を謡曲にあわせて演じているのです。

江戸期に入り参勤交代で殿様だけでなく農民の中から刈り出された下級武士が上京し江戸市中を闊歩します。お国訛りの大合唱です。

当時江戸では武士言葉（当時の武士は軍人ではなく単なる官僚）（＝通常は山手言葉）を使い、庶民は下町言葉を使っていました。時代劇の「……でござる」は武士の話し言葉で、書き言葉は「候文（そうろうぶん）」でした。庶民である江戸っ子の使っていた言葉は落語の世界で生きています。

備前藩士は言葉の前に判別されました。「貧素な身なり」が備前藩士のシンボルです。

こちらは柴田一元就実大学長の講話で知りました。お陰で備前藩は江戸260年間安泰でした。池田家伝統の家訓が生きていたのです。柴田先生のお話は何度聴いても飽きません。難しいことを判り易くお話していただけます。「これぞプロ中のプロ」と追っかけファンの一人として自負しています。

ともあれ江戸文化は上方の浄瑠璃と歌舞伎の最盛期でした。庶民の生活が豊かになった証拠でしょうか。

幕末の江戸人は「しゅんと」しています。なんとと言っても元気な薩摩・長州・土佐等の猛者（もさ）が京都で活躍し江戸を制圧し、東京に帝（みかど）を遷都します。背景に国学台頭と洋学のしゃれた社会の到来です。武士に代わって知識人が洋風文化を広めます。

夏目漱石の「我輩は……」「……である」の新しい東京言葉が文明開化の尖兵として走ります。同時にこの時代から、西欧に習って話し言葉と書き言葉を同一にする国策に代わります。が、実態は先の終戦時に「漢字と平仮名併用文」に教科書も含めて変わって、やっと言文一致策が実現しました。終戦後しばらくは文語体の話し言葉が書籍に残っていました。今読み返すと読み難さが懐かしい齢になりました。

概（おおむね）以上の流れで弥生期から今日までの日本語を見てきました。中学生の皆さんに少しでも役に立ちましたでしょうか。拙論を聴いていただき有難う御座いました。次に日本語に関連する事項について自説を述べます。

14. 公用語と国語(日本語)

西暦2000年(平成12年)頃、21世紀を迎え、マスコミや世情が新世紀に入って、大いに盛り上がっていた頃の一つに、『21世紀の日本の構想』(小淵内閣の私的懇談会)があり、英語を公用語とすべき提案がなされ、今もその線上であると私は認識をしています。

辞典を紐解(ひもとく)までもなく、時の政府が使う国民向けの言葉＝公用語が、日本の場

合には「日本語」だけであるとの不文律の常識が存在する。(法の規定は無い) 欧州などに見られる、異民族が混成している国家の場合には、単一言語では国体は維持できない。そこで各国とも「公用語」を制定しているのだ。同じ土地に暮らす異民族の言葉の学習を強要している訳ではない。

日本は単一民族で単一言語の認識(実際にはアイヌなどの先住少数民族や朝鮮半島からの移住民族などが存在=別の問題)だから、公用語の公式な定義は無いが、世界的には単一民族一言語の方が少数である。今回の提案のある「英語」は第2公用語と仮称しているが、正式には単なる外国語の一つであろう。勿論第2国語でもありえない。公用語制定の法律から始める必要がある。

昨今世界の趨勢は米英を中心にした「英語」が世界の共通語的な意味合いを持ってきた。経済・文化の面で世界をリードしている現実の中で、日本が世界に互(ご)して行くためには「英語」が解せないでは勝負になら無いとの論理である。その主旨には私も理解できるし賛同する。しかし何か変だと思いませんか。

本来の「公用語」は民族の持つ言語を尊重し、国家の構成員である多種民族に国政を円滑(スムーズ)に遂行し行政サービスを自国民(多民族=多民語)行き互らせる必用から、制定しているのが公用語であって、日本が今日進めようとしている「英語」は、単に異民族の外国語の一つに過ぎない。前述の考え方に依れば日本国籍を持った少数民族の言語(例アイヌ語や朝鮮語など)を第二公用語に制定するのであれば、意味合いが変わってくる。

英語を学び使えるように学習する=教育する意義は、その言語の持つ文化などを理解し、グローバル化した世界に羽ばたき、経済・文化の面で貢献できる国民の育成に寄与することが、

他国民からも期待されている。

日本人は「話し言葉」しか持っていなかった時代から、その後に文字=漢学を学び、日本語=日本文化を形成してきた。その精神は幕末の洋学や、昨今の外来語など旧来の日本語を壊すことなく発展してきた、今もその俎(そ)上にある。

そうした認識の上で昨今の論調を省みると、今までの教育である「英語」を特別な扱いで国民に義務的概念に押し付ける懸念さえ感じる。本来教育は国民の権利であり義務でもある。国政は大きな負担を惜しみなく推進し、今日の日本があるが、第2公用語として制定し、国民に日本語以外の「英語」に習熟させようとする国策には、私は多少の違和感を持っている。

元来わが日本民族は新しい文化への探究心は旺盛で、過去の歴史が証明している。必用ならば「洋語を外来語=カタカナ語」とする新しい日本語を創設しているのではないか。

将来を担う子供たちが、自国語だけでなく多民族の文化を知るために、他国語を学び文化や経済面で交流するツールとすることの意義は大きい。

私の孫は私立の保育園に0歳からお世話になっていて、日本語もままならない段階で英会話を日常語として園内では使っているらしい。時に接すると可愛くもあり、痛ましさもある。

日本語の良さを知り、伝統文化を享受しながら異国の文化を理解することが先ず持って取り組むべきことではないか。

15. 紙 paper のこと

紙の起原は文字=漢字に比べると、以外と新しい。当時中国では文字は木簡や竹簡でした。一般には木や竹を削って板状にし、文字を書き

ました。高官は高価な絹布を用いたようです。木や竹の簡それに骨片（彫刻？）では保管が大変でした。後漢時代（25～220）の皇帝が部下の蔡倫（さいりん）に命じて作ったのが「植物繊維を細かくして水に溶き漉（す）き上げて薄い板状」にしたものを発明しました。（＝蔡侯紙）西暦 105 年のことです。毛筆で書きやすくスペースもとりません、その上大量生産が可能になったのです。木簡や竹簡は紙に比べると保存が出来ますので、遺物として考古学の世界では一級の資料です。紙は製本が出来ます。書物として重宝されました。

ヨーロッパではエジプトのナイル河のアシの茎を平らにして作りだしたのが有名なパピルスです。紀元前 2500 年の遠い昔の話です。Paper の語源にはなりました。その後、彼らは遊牧の民でしたから羊の皮を薄く延ばして紙状（＝羊皮紙）にして文字を書いていたのです。しかし文字は書けても製本は出来ません。漉きの工程を経ていないので学者は紙の仲間には入れていないのです。

西暦 751 年にサラセン帝国（**7 世紀に古代イスラム教徒がアラブを中心に一大帝国を造りヨーロッパ大陸を席卷した**）が中国の唐（619～907）と戦い、捕虜にした中国人が紙漉きの技術を持っていました。羊皮紙に比べ格段に使い勝手が良いのです。しかし簡単には製造が出来ません。中国から高価な紙を購入するしかなかったのです。そんな関係は清国（1616～1912）まで続きます。西欧も産業革命（18 世紀半ばから 19 世紀）の時代に入り、資源を求めて植民地政策を進めます。中国にはアヘンを売り、磁器とお茶と紙を求めます。本国に持ち帰り莫大な利益をあげます。

日本には文字が導入された律令時代（7 世紀）には中国で開発されたばかりの印刷技術と共に「紙漉」技術が導入されます。日本の山野に自生している三椏（みつまた）や楮（こうぞ）は

豊富にあります。高麗（こま）の僧曇徴（どんちよ）（生没不詳 610 来日）は仏教を広めるために、日本の豊富な紙の資源を活用し、製紙技術を伝授してくれたのです。推古女帝（554～628）の時代です。聖徳太子（574～622）も活躍して居ます。仏教→経典→漢字→紙の図式になるわけです。

和紙はその後素晴らしい発展を致します。金粉を地にした高級和紙などは芸術品でしょう。日本各地に伝統技術が残っています。明治 5 年（1872）洋紙が日本に入り印刷技術も洋式化するまで、長く日本文化を支えてきました。昔から日本人は、これは良いと思えば躊躇無く取り入れる進取の気質は変わりません。残したい気質です。

三椏などの表皮の黒い部分（黒皮）は今のナイフのようなもので削り取り、白皮にしてから漉き工程に入ります。色抜きの技術も追々進歩します。手先の器用さと粘り強い根性が良質な和紙を生んだと言えます。

江戸期になり生の江戸前海苔を乾物品に加工した「浅草板海苔」を全国に発信しました。紙漉きの技術を取り入れた「知恵者」が居たのです。大ヒット商品になりました。

戦後東京オリンピックの前までの、建築や機械の設計図は、平板に T 定規を用いて美濃紙にカラスクチ（烏口）で墨入れをして描きました。今のコピーに当たるものは「青焼き」と称して、紙面全体が青地になり設計図の部分が白色になるもので、アンモニアの臭いに悩まされながらの作業でした。墨入れした設計図は美濃紙が定番でした。洋紙と違い折り曲げても癖が直りやすく、何より丈夫で保管に適していたのです。

僅かの時の流れで、カラス口は鉛筆に変わり、息子の時代には「製図技術」を学ばないでキャ

ドの時代に入りました。それでも当初は装置だけで1000万円/セット、操作するのに1000万円/年間の費用がかかり、岡山でも大手企業が国の融資を受けての導入でした。今はパソコンも安くなりソフトも無料で導入できます。

サラセン帝国には格別の思い出があります。中学3年の時に社会科の授業でこの時代のことを習いました。先生の説明に納得がいかないで質問したところ、次の授業の当初に「誤り」を認めもう一度同じページを教えてくれたのですが、一時間丸々逆戻りした授業に、後に私の妻になる知恵さんたち多くの級友からブーイングを受けました。後に再会した坂本先生から「君には忘れられない……」と意味深長な言葉を戴きました。あのときの先生の態度は生涯忘れません。立派でした妻との語り草になっています。

16. 製本は手書きで写書し写本

漢文字は筆を使って縦書きとし、木簡や竹簡に書いていました。筆の字は「竹」冠に「聿」（筆の字の異体で毛から来ている）を合わせた文字で、竹を軸に羊や馬その他の小動物の毛を取り付けた筆記用具で、漢文字を縦書きにするのに適しています。中国古代の秦（しん）（紀元前771～前206）に筆のことが記録に残っているそうですから、筆は文字と共に進化してきました。ちなみに日本の訓読みの「ふで」は文+手の「ふみて」から来ていることを付け加えておきます。

前段で紙が発明され格段の文化の発展を見ましたが、製本される事で多くの目に触れ、次の文化の発展があります。印刷技術が開発（中国で868年）されるまでの長い期間、紙に書きしてそれを糸紐（ひも）綴じて製本しました。主に儒書や仏教の経典であります。全て手作業の写書でした。江戸期貧乏書生は高価な本は買え

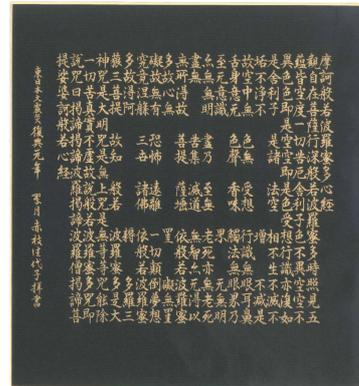
ません。流通もあまりしていない時代です。必要な本は師匠から借用し自分用と師匠のお礼用に余分に写書し製本して返しました。単に読むだけでなく2度3度同じ本を写書するのです。頭の中にしっかり収めることの出来たのは当然です。これらの知識の累積が幕末から文明開化の明治維新の原動力になりました。

お願い「写書し1冊か2冊を貸主に礼として返した」

風習と書かれた書物の一場面が、脳裏から離れません。その言葉＝単語をご存知の方は教えていただけませんか。よろしく。

私の妻は四国遍路をしています。般若心経を誦んじるだけでなく、写経をして奉納しています。庶民に根付いたこの良き風習は今日まで面々と続いています。

写経＝供養などのために経文を書写すること。奈良時代には専門の「写経司」と称する役所も設けていました。



写経は今では現代アート

赤枝佳代子氏（津山在住）の作品 筆者所蔵

山陽新聞に連載中の『御用船帰還せず』の2014.8.16掲載文中に、聴き慣れない「双鉤填墨」（そうこう てんぼく）の熟語が出てきた。高名な「書」（掛軸や手紙類）を今のコピーと同じく実物と変わらない作品に仕上げる技術で江戸の下級武士の内職の一つでした。娘も見よう見真似にその術を身につけた登場人物の所作を、著者の相場英雄氏は「最初の枠線をより正確に丁寧な写し取り、原本と同じような墨の濃淡を

加えることで、本物と見間違えばかりの写本が出来る……」と表現している。

双鉤填墨の技術は唐の六朝時代（222～589）から伝わっている技術だが、木や石に彫刻し拓本をとる印刷技術の普及で衰退し、特殊技能として連綿と伝わっている。

たまたま執筆中のテーマに沿った熟語が新聞連載の時代物の小説の中から、学ぶことも多い。参考にさせていただいた。

17. 印刷技術の発展

木版印刷での本が、今から107年前の1907年（明治40年）に中国の古都敦煌（とんこう）で唐代の『金剛般若波羅密教』の経典が発見されました。西暦868年に作られた書物で、通説ではこれが木版印刷の始まりとされています。漢字は中国で20万字、日本で6万字と言われていきます。資力を問わない、限られた国家事業としてのみ印刷製本が可能でした。結果的に書写製本の時代が長く続きます。日本でも早い時点で導入されますが、一般への普及にまで至りませんでした。その技術は面々と続きます。江戸時代には浮世絵を版木に彫り（彩色版木）流布しました。幕末渡来した西欧人によりヨーロッパに持ち帰り多くの作品が保存されています。岡山にも所縁（ゆかり）のある棟方志功（1903～1975）の作品は大原美術館や津山のM&Y記念館に多くの作品が残っています。その源は「木版印刷」の技術に由来しているのです。確かな痕跡をみました。

ヨーロッパではドイツのヨハネス・グーテンベルグ（1400～1469）が1445年に活版印刷を発明しました。予め各種の活字を作って置き、それを文章に合わせて拾い出し、ブロックごとに集まりを作り、ページを重ねて行く。こうして一冊の本ができるのです。アルファベットの文

字が少なく横書きが幸いしました。漢字文化圏では文字数の数が「準備する活字」の多さが厄（わざわい）して、遅れることになりましたが、活字そのものの製造技術の向上（写真植字＝写植など）で、近代化に成功します。現代はコンピューターとプリンターの時代（デジタル製版）になり益々進歩発展しています。

私は中学の時新聞部に属していました。謄写印刷が今のコピーの使い方と同じで、学期末のテストの問題も、ガリ版刷りの先生の手作りでした。ガリ版の「ガリ」は蠟紙を鑿（やすり）板に置き鉄筆で書く時の「音」がガリガリしたことから、俗にガリ版と称し、専用の小部屋に印刷機が設置され、その室名に手書きで「謄写室」と書いてありました。インクの油で汚れた学生服は（元々誰かの譲りものでしたが）木の盥（たらい）で俎板（まないた）を用いて、母が洗ってくれました。ガリ版の文字の書き方にも技術があって、例えば「す」の字は「ナ」と「c」の組み合わせで書きます。「。」ではなくCの字なのです。鉄筆が重なりますとその部分から破れてしまいます。そんな技も先輩から教わりました。

高校になるとタブロイド版4ページの紙面で全国大会に県（鳥取）を代表して参加していましたが、部活動費（遠征費）の予算が少なく、私費で京都（全国大会の会場）まで行く費用を親に頼めず、仲間に譲ったこともあります。

印刷は日本海新聞の薄暗い活版室で、新聞社の仕事が終わった職人が、組み上げてくれた「ゲラ刷り」を、前夜から徹夜で待機していた我々が引き取り、素早く校正＝今の言葉でチェックするのが新米部員の誇らしい役目でした。早朝に印刷された紙面を帰路の汽車の中で、安物の黒パンを齧（かじ）りながら仕上がった紙面を手にした感動が忘れられません。そんな青春で

した。

18. 常用漢字と現代

日本語は漢字を母体にしながらかみ生語を話し言葉のベースにして発展し続けます。今使っている文字は6万語とも言われています。全て文字を身に付けるには国語学者になって一生を過ごすしかありません。

特に戦後漢字の不要論が出る中で、最低限これだけはとして「当用漢字」(1976年1850文字)が制定され小学で1006文字(教育漢字)を覚えれば良いことになっていますが、中々身につけません。

現在常用漢字は平成元年に制定され平成22年に2136字(音2352訓2036合計4388)の音訓文字を覚えれば一人前の日本人といえます。

(強制されていません) 専門家はそのうち1500文字を目安に普及に励んでいます。

大人でも小学生が身に付けるべき1006文字を全て書ける人はグッと減ります。「話す」「読む」「書く」は全て完璧でなくてもかまいません。今ではケイタイ＝携帯電話を辞書代わりに利用している人が増えました。今回の改訂で専門家の意見を取り入れて「振りかな」＝ルビを多用して容易に読めるよう勧めています。最近の社会変化に国(文部科学省)も追認しているのでしょうか。

日本語学者の野村雅昭先生(1939～・日本語学会会長)は衝撃的な発言をなさっています。

「常用漢字は1500語ぐらいにして、国際語の仲間止まる努力をしないで、文字数を今回のように増やし続けると、国際語の仲間から失脚する」との主張です。

日本語は元々微妙な表現が多く(私はそれが日本の文化だと思いますが)外国人から見ると難

解な言語になっていて、東南アジアから介護分野などに進出する労働者の弊害になっているとの指摘です。国家試験合格の前に難しい日本語をマスターしなくてはなりません。実習などの面では患者に好評でも、国家資格を取れないと帰国させられるのです。

視覚・聴覚障害者にとっても同じことが言えます。弱者に優しい社会の実現に常用漢字が障害になってはいけません。子供にとって暗記を求められる漢字の試験と、年代と歴史上の人物を暗記する「歴史」も嫌いな学科の二大科目と聞きました。それで良いのでしょうか。

野村雅昭先生の話も傾聴に値すように思えてなりません。日本文化を世界の人々が認めてくれる時代になりました。それに相応しい「日本語」が求められています。

19. 方言でないアイヌ語

民族ごとに言語＝言葉があると申しました。さすれば地方ごとに言葉があって当然です。それが方言と呼ばれています。

古代から「エゾ」「エミシ」「エビス」は「蝦夷」の文字が使われ、列島の遠く離れた僻地のイメージで大和人は捉えていました。東北北海道は全て蝦夷の地でありました。氷河期の終わり旧石器時代末期に、樺太(カラフト)と陸続きの地に今のアイヌ民族が広く分布しており、列島の縄文人と似た生活をしていました。

調べてみるとアイヌ民族の使うアイヌ語は言語学の世界では日本の方言の仲間に入っていません。国家では正式に認めていない民族も、学者の間では単独の民族語として、はっきり区別しています。金田一京助先生(1882～1971)の民俗学者としての調査と功績は大きいものがあ

ります。先生は『明解国語辞典』の編者として子供の時から馴染みが深く常に枕元に置いて愛用しています。親子三代にわたる国語学者の家系ですが東北出身らしく素朴で親しみやすい語りは孫の代も変わらないようです。最近孫の秀穂先生が京助・春彦先生のことをエッセイにして『金田一家、日本語百年のひみつ』(朝日新書)を出版されました。是非拝読したいものです。

アイヌ民族は日本列島の先住民族として、樺太・北海道・千島・東北に各々アイヌ族が分類されアイヌ語の方言的な形で残っている。文字を持たないで口承の形で、自然を相手に共存して来ましたが、江戸初期から蝦夷(えぞ)地(今の東北から北海道以北)に和人が侵略し明治になり、益々強力な同化策が今日まで続いています。明治32年「北海道旧土人保護法」制定以来土人扱いを受けてきましたが、平成11年にやっと「アイヌ文化振興法」が制定され「土人」扱いはなくなりました。しかし国による少数民族の認定はされていません。択捉(エトロフ)や国後(クナシリ)を日本の固有領土と主張するならば、先ずアイヌ民族を先住の少数民族として公式に認めることから始めるべきです。アイヌとはアイヌ語で「人」を意味するように北海道には今でもアイヌ語からの「借用語」が多く残っています。代表的なアイヌ文化は「ユーカラ」で、アイヌの口承叙事詩で先祖を崇拜し自然に祈り今日に伝えています。

**アイヌの楽器＝ムックリです
音色が哀愁をおびています
残念瀬ら私は演奏できませんが、専門化の奏でるムックリは、アイヌの想いが伝わってきます。筆者所有 写真も**



私有土地を持つ概念のない民族で、自然を神

として崇拜しながらの生活は、縄文人と変わらない生き方(過ごし方)でした。氷河期で大陸と陸続きの旧石器時代からの先住民も、和人＝本土人が、時の政権の政策で移住し、大地を分割横領しました。真摯に歴史に向き合うべきと考えます。アイヌ語を日本の方言扱いにしない学会に敬意を表します。

20.方言で地方文化を守ろう

日本の方言は本土系と琉球系の二つの方言に分類されているのが定説で、本土系は東部・西部・九州に区分した東条操(1889～1968)の説(1927)が発案していて、柳田国男(1875～1962)等の多くの民俗学者や言語学者が研究し続けている。私は琉球の言葉は「琉球語」(＝沖縄語)と独立したものと考えていましたが、専門家は日本語の枠の中で大きく二つに区分しています。俗に東京弁(＝標準語)、関西弁と云われ関西は長く政治の中心であった京言葉に源がありますが、商人の力が増した江戸期以降大阪弁が京言葉を席卷しています。気位の高い江戸人は銭のことに執着する商売人＝大阪人＝大阪弁を蔑視する傾向は近年まで続いていました。

岡山で方言を語らしたら青山融氏(1949～津山生まれ)が一番身近な知人である。マスコミに常時登場し著作も多い。歴史系のウオーク仲間ではあるが、オセラの編集長(当時)の肩書きに似合わない気さくな好人物である。お陰で私もオセラに登場したことがある。

オセラの雑誌名は中国地方で大人のことを「オセ」と云います。ラは等にかけて、しゃれた雑誌名になっています。

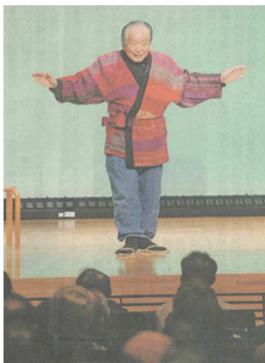
昨今「方言指導」として映画やTVドラマの画面に「スタッフロール」に流れることが多くなった。振り返るにこの役どころは、昔は聞かなかった。24年前の『イミダス』には掲載され

ていないから、方言が重視されて来た証拠と、内心喜んでいる。当時はまだ方言は軽視された中央志向の世の中だった。軽快なメロデーに乗って「J・J・Jー」が昨年の流行語大賞になった。今年も聞きなれない「こびっと」(甲州弁)にも慣れてきた。

子供のころ、米子の伯父夫妻が帰省した時に話す「西言葉=米子弁=出雲ことば」の独特な「ズーズー弁」で「段々・段々」の連発に奇異を感じたことが懐かしい。夜学時代の関西弁が身に付いたころ、東京に出た。若い同僚の女性に接して一種の畏怖を感じ、早々に幼馴染と結婚した。時を経て昔の同僚と再会すと「君も岡山人になったね」と会話の中に出てきた。「そうじゃ 私も おきややま人じゃ」と返す。マスコミのお陰で急速に中央集権が進んだ象徴が東京弁=標準語で、地方の人は言葉の面でも二重構造の社会に生きている。

昭和40年代初め、青森弘前城の仕事で、津軽弁でしゃべっているオバサンに話しかけると、綺麗な標準語の返事が返ってきた、東京オリンピック直後の頃を思い出す。既に言語の二重化が浸透していた。

選挙の時に地方重視を連呼する政治家も、活動資金は都会の企業から得ているのかどうか、一向に地方は良くなる。しかし都会育ちやUターンらしき子連れ若夫婦が、棚田で精を出したり、牡蠣(かき)筏(いかだ)に乗って作業をする映像を見るたびに「ホットする」。自然との共生は地球環境を守る原点だ。岡山を中心とする後楽園の少し上(かみ)手の旭川(一級河川)で鮎釣の竿がしなる。そんな環境を守っていききたい。地方文化の象徴的な方言も大切な要素と私は思う。



写真は2011.1.18 山陽新聞

立石憲利(1938～ 津山市生まれ)先輩は県下に残る民話を丁寧に聴き取り、その言葉を使って今に残す活動(民話の本や語り部)を生涯の仕事にされ、成果は大きい。

以降は次号(12号)に掲載予定

「日本語に生きよう」は、26ページになりますので、3回に別けて掲載しています。

1回目“きび考”工10号の内容

はじめに

1. 日本民族の起源
2. 弥生末期の日本人は大陸と交流
3. 古墳時代は独自文化
4. タミル語が黒潮に乗って
5. 文字導入を古事記と万葉集で見る
6. 歌と踊りで伝承
7. 文化の発展が文字を必要とした
8. もじは仏教経典(お経)で学んだ
9. 弥生語と漢字の融合
10. 近隣諸国の言語の事情
11. 日本語の二重構造(真名と仮名)

3回目“きび考”12号の内容

21. 外来語(カタカナ語)
22. 英語になった日本語

- 23. はなし言葉は古典・民衆芸能の中に
- 24. 書き言葉の日本語は文学の華(はな)
- 25. 点字も日本語
- 26. 手話も立派な日本語
- 27. 翻訳は著者を超える
- 28. 通訳は今の瞬間を表現
- 29. 速記は役目を終えたか
- 30. 新しい会話のコミュニケーション

『縄文時代人は風水を知っていたか。縄文人は
何処から来たか』 矢吹壽年

3回 平成25年9月17日

『第一回四国八十八ヶ寺遍路旅(春)自転車旅』
中島康之

『四国八十八ヶ所巡り 歩き遍路の旅』

『きび考』寄稿 樋口俊介

4回 平成25年11月19日

『芥子の光』尾高庸子

5回 平成26年2月11日

高島シリーズ「幸(高)島」訪問

『吉備に邪馬台国』の著者

ガイド 岡崎春樹 近藤孝正

6回 平成26年4月6日

第1部『吉井側右岸の貝塚 現状報告』

中西厚 丸谷憲二

第2部『草ヶ部 法追(ホウエ) 貝層の現状報告』

中西厚 丸谷憲二

7回 平成26年6月19日

『太伯と邪馬台国 倭人は太伯の子孫説 - vi 邪
馬台国吉備説論戦参戦』 丸谷憲二

8回 平成26年10月8日

第1部『上道(かみつみち)の物語』 中西厚

第2部『草ヶ部 大廻り小廻り山城の考察 古

代山城名の推定 菊山城 古代の

迎賓館説』

中西厚 丸谷憲二

9回 平成27年2月11日 高島訪問シリーズの最
後になります。

岡山港前の「高島神社」訪問

岡山市児島湾の宮浦説

先史古代研究会

平成25・26年度

例会報告

先史古代研究会事務局

- 発表者募集中 自分の考え、思いを気軽に発
表しましょう。1~2時間内
- 希望者は事務局へ連絡下さい。説明・配布資
料作りは丸谷がお手伝いします。

1回 平成25年5月22日

先史古代研究会 発足記念例会

第1部『吉備国の古代製鉄と熊山遺跡出土の陶
製筒型容器』 丸谷憲二

第2部『古代製鉄 たたら』 福留正治

2回 平成25年7月17日

『きび考』の発行実績 岡山県立図書館・岡山市中央図書館 西大寺緑化公園緑の図書室 蔵書	
1号	平成22年7月1日 日本先史古代研究会として発行
2号	平成22年10月1日
3号	平成23年1月1日
4号	平成23年7月15日
5号	平成24年2月29日
6号	平成24年7月31日
7号	平成24年12月31日
8号	平成25年10月10日 先史古代研究会として発行
9号	平成26年3月31日
10号	平成26年9月31日

資料作成 丸谷憲二

10:30

岡山駅①乗り場 9:43(10:03)発(430円)



弁当持参・参加費＝500円 小雨決行
参加志望者は山崎(090-3746-3819)へ
貝殻山貝塚遺跡へ便乗して探訪を予定

第9回 2月例会は

児島の高島へ

『記紀』伝承の「児島高島探訪シリーズ」の最後は、旧文部省が明治18年明治天皇に岡山巡幸の折発せられた一言で「神武天皇聖跡高島宮伝説地」に認定した(国のお墨付きを戴いている)高島に、地権者の関係者のご理解を戴き、上陸し探訪いたします。

この島には高島神社の本殿の他に、古代祭祀の残る岩座や古代遺物出土地でもあります。

探訪の案内

日時:平成27年2月11日(水)建国記念日

集合:岡電＝三幡南バス停 徒歩約10分

三幡漁港(辻数馬宅前)

編集後記

- 今回はお二方に特別寄稿を戴きました。浦上様には、次回例会の講師を予定しています。日時は後日案内します。
- 矢吹会員から「漢字伝来」の詳しい論文です。長文に付き半分を掲載します。
- 笠岡高島の藪田さんをご高齢ですがお便りを戴きました。概要をお伝えします。
- 次回の例会から「例会レポート」を掲載します。担当は丸谷会長としますが、皆さん協力をお願いします。
- 樋口会員の「遍路シリーズ」に重康邦夫様から感動の感想文を戴きました。ご了解を戴いたので掲載します。皆様の感想などの寄稿をお待ちしています。

“きび考” 第11号

2015（平成27）年1月20日発行

発行 先史古代研究会 会長 丸谷憲二
事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1
山崎泰二方

電話=086-276-6654 FAX=086-276-2241

メール=senshi@bosaisystem.co.jp(事務局)

編集委員 山崎泰二（事務局長兼編集委員長）
井上秀男 延原勝志 樋口俊介
濱手英之 丸谷憲二（会長）

先史古代研究会のホームページに掲載